328-3

# 北條時宗

明治
42 9 28
内交

# 序

衲、錫を鎌倉近傍に留むること月餘、晨昏無爲、食罷唯睡快を圖る而已、一日例に依り黒憇の郷に遊ぶ、于時一聲高く午睡を破る者あり、覺めて之れを見れば遞夫の一封を投ずるなり、披見すれば濱地天松居士書を寄せて云く、近頃道友菅谷秋水居士、相模太郎時宗の史跡を論評す一讀その盡せ

るに敬服すと、因て衲に序を乞へり、依て衲更に全篇を一讀するに、着眼奇拔識見高遠、筆勢の陶鑄また自ら禪機を帶ぶ、特にその來由の淵源を探りて方外の勝友蘭溪佛光等の禪師に皈着せし如き、一隻眼を具する者にあらざれば思ひ及ばざる處なり、相模太郎の靈、地下にありて必ず言はん汝我が臆を得たりと、居士は深く東西の學に通



じ親く我門に參し、身を閑地に處すと雖も志常に國家の經綸に存す、曾てポーツマス談判決了を聞くや外交失敗史を著して國家の將來を警む、今また相模太郎を話題に捉へ來て、自得の禪膽武畧を振ひ以て國家前途の警鐘に充てんとす、其志氣や衲の深く嘆賞する所なり、されど門庭の施設は即ち得たり、入理の深談は未だし、試に秋

水を高く捧げて一槌に打碎せば僅に大道の坦然を得ん歟。

明治四十二年八月十六日適ま陰曆七月一日

於相模洋下怒濤飜激之處

斧山漁老





## 小序

秋立つと云ふ日。倦遊鎌倉より歸る。さやかに見へねど。初風の欄角に音づるゝ心地せり。親燈讀書の節も。やがて來ぬべし。

畏友秋水菅谷君。學該博にして。識古今に通ぜり。つとめて名聞に遠ざかるを以て人の知る鮮し。此夕其新著「北條時宗」を懷にして訪はる。太郎が一代の偉業を叙して。儘

高僧日蓮に及ぶ。描寫明快議論卓逸。眞に皮裡陽秋の筆致と云ふべし。卷を掩ふて更に餘味の津々たるを覺ゆ。燭を剪つて。弘安の當時を語る。濤の聲松の韻尙ほ耳に在り。白酒論文の興。夜と共に深し。近什二絶を書して叙に代ふ。

觀音廿五字斜々。誦罷疾雷摧釵花。
安國一論天下定。春風古寺說年華。



百萬得歸三四人。太郎雄武固無倫。
天恩今日及枯骨。不許史家徒說神。

雨山居士

## 自序

此の日、謾りに開かず、此の手、妄りに動かさず、端然として座し、陶然として眠り、雨花風月時と共に移り、刹那も生死して一毫も住まらず、天、地に磅礴して、永く武士の正氣をとゞめ、以て我が金甌無缺の國を護らんと欲す、亦た佳ならずや、是れ余が此の篇を草して、江湖に質す所以。

明治四拾貳年八月上梓成るの日、炎熱金をとらかす處に於て

秋水識

# 北條時宗

## 目次

**第一章　時宗と武士道の權化**……一

頭大公と法光寺殿……皇國の精華……武字の面目……殺人の具活人の術……世は不倒翁の如し……大和民族の本領……世界平和の中心……世界の分野……油斷もすきもあらばこそ……平和會議……黄禍說……平和の司命を制するものは誰ぞ……金甌無缺の國……相摸太郎善く怨必烈を覇破す……却て蒙古に向て問罪の師を起さんとす……千秋の恨事……優柔不斷の罪……正法眼藏涅槃妙心……相摸太郎と贈位

**第二章　時宗と佛光禪師**……一三

小笠懸けの古術……遺傳と薫陶力の感化……最明寺の血液……相摸太郎の弱點は贈の小に在り……意氣柔弱恰も處女の如し……時宗の品性は張子房に髣髴たり……禪の力……佛教中一種特殊の立敎……奈良朝と平安朝……泰時とあるべきやう……貞永式目の神髓……心要な錬るの外帷幕に參與せしむ……

目次

時宗を觀んと欲せば先づ佛光を觀よ……時宗と五事の修養……後光明帝と時宗……莫煩惱の三大字……途の草々の自白……禪の極意……心とは何ぞや……哲學は禪の一部なりと言ふを得るも哲學は即ち禪なりと云ふを得ず……楠廷尉と兩頭……無明の臘力……王陽明と餓虎……王陽明の自覺と時宗の自覺……馬鹿にすべく作られたる相摸太郎……東郷大將とやッつけろ……村田清風と賴山陽の詩と相摸太郎……先天的時宗と修練的時宗……時宗の一種の牢獄……佛光禪師と澤庵和尚……佛光禪師と自畫自賛……元寇と佛光禪師と日蓮上人……西郷南洲と勝安房と禪……毛唐人の泣く處歐米人の驚く處……三國干涉と陸奥福堂……今上陛下の御製……河野通有の心と明治三十七八年の心

## 第三章　時宗と忽必烈……四九

賴山陽の元寇論……餓木眞以來傳家の筆法……最初の牒狀……第二の牒狀……龍の口の斬首……忽必烈が雖助の情……時宗は山陽が云ふ如く宋の事を知らざるものにあらず……時賴と關溪尊氏と夢想家康と天海……門外漢の日蓮……當初局に當るものゝ優柔不斷の罪……祖元が幾多の錯誤を得て始て膽力の如くなりし……何を言ふべきかを議定すべき時にあらずして何を爲すべきかを決定すべき時なり……菅原氏草する處の答案……百の胡濬菴と千の陸秀夫文天祥……櫻井中尉の所謂ゆる肉彈……露の東洋艦隊司



目次

令長官マカロフと海軍戰術論……我邦の萬國に冠絶して異彩を放つものは斯の道あるが爲めのみ……鄭必烈と露と同巧異曲……時の當局者が怯懦にして無事を希ふ姑息心……近衛霞山公と國民同盟會……射劍を忘れざるは人の情……我れは早晩彼れが感謝を受くるの日あるを覺悟せざるべからず……近くば波斯の革命……山は月權の鐘に應ふ

## 第四章　時宗と日蓮上人……七〇

日蓮の膽勇と手腕とは時宗に減ぜず……彼れは無冠の帝王よりも寧ろ執權其のものに戀々たるもの……一の青砥藤綱の位地……日蓮の尊き所以は形而上の乾坤に霸氣を洩らしたるに在り……身延山頭雲白く山青き邊……法華經六萬九千五百五言中唯此の四大字……我は釋尊の再來也……念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊……日蓮が法界に霸を成さんとするは猶ナポレオンが世界の封建を破らんとする大志の如し……日蓮の立正安國論……驛頭第一鎌倉執權に向て洗禮を行はんとす……蒙國來寇の讖言は弘法の大骨子にして日蓮の死活問題……日蓮曾て泉涌寺に關溪に從ひ筑紫の勞を取り爲めに外情を知ることを得たり……日蓮の蒙國來寇は元寇に於て殆んと無意義に屬し何等の功德なし……僅かの天照太神正八幡……日蓮が眼中大日本帝國なく唯一の法華經あるのみ……龍の口の御難……宗門弘通の免許狀……日蓮時宗

目次

を容れず而して時宗善く日蓮を容る……執權の家に生れずして穢多の子に生る……鳥延山頭に秘め置ける深密傳……彼れは憤りを以て身を起てり故に彼れは身を終る迄之を冷却せざりし……親鸞止を用ひ日蓮奇を用ふ……大菩薩の三字を拈して日蓮をかつぎ揚げんとす

第五章　國家と武士道の消長……九七

武裝せる平和……貧は益貧富は益富……堂々たる國家の干城陸軍中將にして破廉恥罪に問はるゝ被告あり……唯酒匂の一死……猶是れ花は櫻木人は武士……名字帶刀の二……日本風俗史中に特筆すべき一大事因緣……壬申の詔勅……眞宗皇帝と魏野……リシエリウとアカデミー……源白石と穢積兄弟と坂谷……細川頼之と阿彌陀佛……大臣宰相と賤業婚……頼之と杜子美の詩集……刑律と黄金……富は未だ以て國家の性命とするに足らず……カンパランドの沈沒……對島水道と筑紫の二大戰勝を有する歴史的國民……アルフレット、マーシャル氏と經濟的武士道……法光寺殿果公大禪定門に參し來れ

第六章　時宗何人ぞ……一一九

人間至極の大寶……事情と周圍の奴隷……不朽の生命……岩崎久彌と貧乏ごつこ……學校圖書館其の他のあらゆる慈善事業……口を家憲に借りて一錢を貸すを惜む……金錢は偉大なる品性に伴はざれば何等



目次

の價値をも有せず……一のエマーソンと百のカーネギー……ブラッキー氏の品性論と紳士繪圖……ロスチャイルドと臨終の奇言……維摩居士と身の無常……死と足利直冬の詩……生兵法大疵のもと……千百の公案と一句の警語……逢麟の不識と上杉謙信……永嘉大師と述懐……瑩山國師と座禪の用心……越すに越されぬ大井川……非思量底の前には智慧も學問も入らない……鬼面人を嚇すの材料……釋迦と明星……太田道灌と大身の鎗……後醍醐天皇と大燈國師……資朝俊基慥かに維新の三條岩倉……大石良雄と硯の機緣……小原鐵心と月落の一句……非思量底の好音信……美人名將老病の狀……現實社會を代表する見本の人……唯だ大慈大悲の心

第七章　北條氏と禪の關係……一六八

空前絶後の罪惡……北條氏七代を抹殺す……坊主が憎けりや袈裟まで憎くし……山陽と北條氏と禪……北條氏の悖逆に安んずる所以……藪から棒……口に堯舜を唱へて禍心を包藏せるもの……死んだ子の歳を數へて緣なき人を怨む……悖逆無道皆な保元平治に見聞したるもの……天道是歟非歟……淮后親房の頼朝泰時論……親房と山陽の論理の徑庭……國家百年の爲め立論せし神皇正統紀……陪臣として權を執る事は和漢兩朝に先例なし……北條氏の七世の久しきに傳ふる所以……因果應報の理……驕る平家に二

目次

代なし……山陽が源氏を助けて北條氏を亡ぼす献策……歐陽永叔の本論と韓愈の佛骨の表と山陽が輝學論……柿蔕才眉といふよりも寧ろ本氣の沙汰にあらず……山陽が白を切るところ……泰時時頼時宗が勤儉尚武の賜もの……今の元勳と因果應報の理……承陽大師の辨道話と要休の人と爲りと今の元勳諸公

附

大乘決疑經證道歌（原漢文古詩體）……一

目次終



# 北條時宗

菅谷秋水著

## 第一章　時宗と武士道の權化

頭大公と法光寺殿——皇國の精華——武字の面目——殺人の具活人の劍——世は不倒翁の如し——大和民族の本領——世界平和の中心——世界の分野——油斷もすきもあらばこそ——平和會議——黄禍說——平和の司命を制するのは誰ぞ——金甌無缺の國——相模太郎善く忽必烈を觀破す——却て蒙古に向て問罪の師を起さんとす——千秋の恨事——優柔不斷の罪——相模太郎と贈位

「人は石垣　人は塀　情は味方　仇は敵」是れ源右府が天下の總追捕使として　其の抱懷せる志を洩らすの詩にあらずや　其の器宇の大なる局量の寛き　磊々落々眞に頭大公の名に愧ぢず　借問す　猿面郎が難攻不落の金城　酒々たる鎌倉御所と　其の運命幾許の差かある　物換り星移り　さしも榮ゐし覇圖の趾は　今や變じて咿唔の鄕と化せり（鎌倉御所の趾今師範學校たり）白旗の山　星の井　七里ケ濱　腰越の里　形勝依然として七百載の昔を語り　霏々の雨　颯々の風　坐ろに人をして懷舊の情に咽しむ。

余の鎌倉に遊ぶや　八幡の祠に謁し天下泰平を祈り　其の頭大公を叩く手を收めて　先づ法光寺殿に詣ふでゝ之れを合せ　當時公が　膽斗牛を壓するの雄烈英風を欽せずんばあらず　法光寺殿は　即ち相模太郎北條時宗にして　瑞鹿山圓覺寺佛日菴に在り　夫れ皇國の精華は　武士道と禪的精神の融和に成れり　而して善く其の武士的精神を遺憾なく發揮せしもの　古今時宗に及ぶものなし　噫偉なる哉時宗　大なる哉相摸太郎　彼れの英靈は終古死せじ　今其の冷かに禪榻に靠れる　彼れが風丰を想ひ　轉た今昔の感に堪へず「泉聲咽危石、日色冷青松、薄暮空潭曲安禪制毒龍」の慨あり　花は三芳野人は武士　彼れは武士の武士　人中の王　武士道の權化たり





夫れ武の字たる戈を止むるに成る　嗚呼武の字たる戈を止むるに成り直ちに平和を意味す　武は平和を求めて動き　平和を得て止む　旨ある哉武字の面目　大なる哉武字の本領　聖人世を憂ひ後ちを戒め一字を苟もせざる處　凡情の得て測る可らざるものあり　是れ其の利の大なるもの隨て害大なればなり　世の徒らに武の殺人の具たるを知りて　活人の術を知らざるもの　獨り正義人道の罪人たるのみならず　抑も又武の罪人

なり　彼の翩々博愛を口にし　戈を動かすを以て平和の主義に反すと爲すものは　未だ平和の爲めに戈を止むる所以を知らざるものにして　又武の何物たるを辨せざるのみ

嗚呼眞武々々　平和は眞武の光輝なり

世界終に干戈の熄む時あるは疑ふ處にあらず　エマーソン曰く　天下の事は恰も不倒翁の如し　如何なる方向に轉ずるとも　終には必ず其の正位に復すと　旨ある哉言や　然りと雖へども　吾人は曾に是を天意に一任せず　勇往直進　奮つて干戈を絶たしむる大自覺なかる可らず　而して斯の大自覺や　即ち大仁大愛大慈悲に起り　武の所謂ゆる戈を止むる妙用一字に存す　仁や　愛や　慈悲や　獨り之れを倫理家及び宗教家が社會の缺陷を補ふ閑家具に附す可らず　苟も天意を知るの國民は　奮つて之れを事實に活現せざる可らず　而して此の大自覺あるものは　我が



大和民族を措て夫れ將た孰れに求めん

敷島の大和心をひと問はゞ

朝日に匂ふやまさくらはな

威あつて猛からず　是れ和の本領　易に曰く　大和を保合す　又曰く中和を致し天地位し萬物育す　敷島の大和心蓋し此の意に外ならず　大和の二字を以て我が日本に冠し　稱して大和民族と呼ぶもの　安んぞ世界平和の中心　我が大和民族に因て發祥せらるゝに非ざるなきを知らんや　夫れ武は　仁愛慈悲に成り　正義人道の上に立つ　曰く撥亂　曰く反正　之れを膺ち之れを懲らす　要唯平和に在り　嗚呼平和々々　誰か立て平和の司命を制するものぞ

眼を放つて世界の分野を觀よ　曰く英　曰く佛　曰く露　曰く獨　曰く日　是れその列宿中　最も燦然として光りを放つもの　油斷もすきもあ

らばこそ　雲は嶺頭に在て閑不徹　水は磵下を流れて太忙生　少しく宇内の消息に通ずるものは　此の詩の解す可く解すべからざる妙味を感じ、列强の機微を窺ひ知ることを得ん　エクォール　オポチニチー　一朝平を失すれば　山河大地忽ち砲煙の修羅と化す　觀自在の眼を以て之れを見れば　實に蝸牛角上の爭ひ　搏噬攘奪　眞に兒戲に類す　吾れ釋迦ならざるも之れを悲み　基督ならざるも之れを憫み　孔子ならざるも之れを憂ふ　輓近世界平和會議の起る　蓋し少しく其の弊に堪へざるを自覺し來るものゝ如し　嗚呼誰か立て平和の司命を制するものぞ

那翁　歷山王　忽必烈　近くは又露が東洋に於ける拓土開疆の手段の如きは　畢竟平和の敵　武の賊なり　膺つて而して之れを懲らす　是れ概を以て概を拔くの良法にして　亦た仁愛慈悲の妙用を事實に活現し宇内をして平和の光輝を仰がしむるものに非ずや　蓋し我が大和民族の





天資は　灼として燎かに　屹として高く　發して萬朶の櫻となり　凝つて百錬の鐵となり　上に忠　下に慈　物に當つて公平私なく　事に處して坦然怯怖することなし　日露交戰の際　我が赤十字の一擧手一投足は列强環視の中に　仁愛慈悲の妙用を活現し　黃禍を唱ふるものすらも口を箝せざるを得ざらしめしを觀るも　宇内終局の大目的たる平和の　如何に我が大和民族に負ふ處の深く且つ大なるを知らずや　是れ個人本位を以て源を發したる歐洲列國人の世を更ふるも成し能はざる處にして獨り國家本位を以て立てる我が大和民族の天に代つて　斯業を大成する事を得る所以なり　宇内平和の我が大和民族に負ふ處　九鼎大呂より重しと謂ふ可し　而して斯の大責任は大自覺に起り　大自覺は武士道より生じ　武士道は天と一致す　苟も天を以て心を徹見せば　即ち我れ大にして物小なり　物盡きて我れ盡くるなし　夫れ盡くるなきものは　微塵も

六合　瞬息も千古　生も愛するを知らず　死も惡むを知らず　自ら處して超然　人に處して藹然　無事に澄然　有事に斬然　得意に歐然　失意に泰然　順逆縱横與奪自在　斯の如き人を以て國家を組織する一團之れを名けて金甌無缺の國と稱す　而して我が武士道の根原は　之れを建國の始に發し　皇祖皇宗の陶冶し玉ふ處にして其の由つて來るや久矣

而して特に武士道の名あるは鎌倉より創る

忽必烈の祖鐵木眞　蒙古より倔起し　天山を踰へ鐵門關を破り　西歐洲の東南部を略し　南　交趾緬甸を征し　東　印度を掠め　北　露西亞匈牙利を侵し　儼然自ら成吉思汗と稱す　蓋し王中の王なる意なり　忽必烈に至り　更に版圖を擴め　金　宋を滅し　元と號す　元は易に所謂ゆる大哉乾元の義に取ると云ふを觀れば　元と云ひ　成吉思汗と云ふ其の意宇內混一に在り　既に四隣を威嚇し　餘威南洋に及ぶ　忽必烈の



眼中　日本帝國なく　唯眇たる一島嶼の映るのみ　乃ち宇內混一上に於ける一種の障碍物　否　眼ざわりとして　之れを排除せんと欲するに過ぎず　恫愒裡に懷柔を包み　懷柔處に恫愒を示し　及に血ぬらずして之れを得んと欲す　其の屢々書を致し使節を派するもの之れが爲めのみ而して朝野震駭　或は以て之れに答ふるあらんとす　時宗執て不可とし　其の書を斥く　使節來る　之れを龍の口に斬る　復た來る　之れを博多に斬り　百尺竿頭一歩を進め　却て彼れに向て問罪の師を起さんとす　曰く　明年春將さに兵を發して蒙古を征せんとす　宜しく戰艦を修め　器械を備へ　水主を簡ぶべしと　是れ「還つて槍頭を把つて敵を倒刺し來る」もの　借問す相摸太郎　其の大度量那邊に於て得來れる先哲曰く　譎詐方なく　術略横出す　智者の能なり　譎詐を去つて　而して之れに示すに大義を以てし　術略を置て　而して之れに臨むに正兵

を以てす　此れ英雄の事　智者の能はざる處なりと　嗚呼相摸太郎　其の大意力這裡に向つて之れを得たる

相摸太郎善く忽必烈を觀破す　故に善く忽必烈を挑撥す　始め主働的なる元は　今や其の位地を變じて受働的となり　主客顚倒　激して而して來り襲ふ　勝敗の數　孫吳を俟つて後ち知らず　而して無情の颶風　元寇十萬を奪將し去り　日本刀をして鮮血に膏せしめざりしは　豈に千秋の恨事にあらずや　個中の趣を會得せば　五湖の烟月自ら懷襟に入り

眼前の機を破り得ば　千古の英雄盡く掌握に歸す　這般の消息を識るものは時宗の友たり　世の徒らに纖巧を事とし　機宜を失ふ徒の知らざる處なり　之れを博多に斬り　之れを龍の口に斬る　根蔕手に在り　一線紊れず　卷舒自由行止我れに在り　一毫も他人の提掇を受けず　驀直進前　斷々事を決する　圓石を千仞の淵に投ずる如し　是れその千古無比



の桀驁忽必烈をして　後へに瞠若たらしめし所以

夫れ交趾緬甸を問はず　露西亞匈牙利を論せず　金となく宋となく　其の戈を倒して忽必烈の脚下に屏息するもの　優柔不斷の罪に職由せずんばあらず　朝議或は以て彼れが旨に副はんと欲す　然るに時宗　一決して回らず　國難を雙肩に擔ひ　斷々として疑はず　乾坤を座斷し　全身獨露底の大々的手腕を揮ひたるもの　一つに正法眼藏涅槃妙心を得るに在り　時宗徵せば。

我が金甌無缺の寶祚　未だ其の如何を知らず　畏くも

叡聖文武なる今上陛下は　時宗の舊功を御追念あらせられ　明治三十八年五月十八日　左の如く　贈位の御沙汰あらせらる　神奈川縣知事周布公平　奉はる

故正五位下相摸守

## 北條時宗

贈從一位

特旨ヲ以テ位階追陞セラル

物換り星移る五百歳　而して又近く日露の變あり安ぞ時宗の氣魄　疑つて天地に磅礴し　憑つて以て我が國民の所決を刺衝せざるにあらざるなきを知らんや　余は少くも國論の一致　時宗に私淑する處鮮少ならざるを信せんと欲す　噫偉人の出處進退　興亡盛衰の運に影響する處　誠に塞心に堪へざるものあり　大乘決疑經に曰く　大丈夫慧劍を秉る　般若の鋒金剛の餙　早く既に天魔の膽を落却すと　吾れ時宗に於て之れを觀る。





# 第二章　時宗と佛光禪師

小笠懸けの古術—遺傳と薫陶力の感化—最明寺の血液—相摸太郎の駒點は膽の小に在り—意氣柔弱恰も處女の如し—時宗の品性は張子房に髣髴たり—禪の力—佛教中一種特殊の立教—奈良朝と平安朝—泰時とあるべきやう—貞永式目の神髓—心要を鍊るの外帷幕に參與せしむ—時宗を觀んと欲せば先づ佛光を觀よ—時宗と五事の修養—後光明帝と時宗—莫煩惱の三大字—途の草々の自白—禪の極意—心とは何ぞや—哲學は禪の一部なりと書ふを得るも哲學は即ち禪なりと云ふを得ず—楠廷尉と賴頭—無明の膽力—王陽明と餓虎—王陽明の自證と時宗の自覺—馬處にすべく作れたる相摸太郎　東鄕大將とやつけろ—村田清風と賴山陽の詩と相摸太郎—先天的時宗と修鍊的時宗—時宗の一種

の牢獄——佛光禪師と澤菴和尚——佛光禪師と自畫自贊——元冠と佛光禪師と日蓮上人——四郷南洲と勝安房と禪——毛唐人の泣く處歐米人の驚く處——三國干渉と陸奥福堂——今上陛下の御製——河野通有の心と明治三十七八年の心

相摸太郎時宗は　建長三年五月十四日を以て生る　母は陸奥守北條重時の女　史を按ずるに曰く

時宗小字は聖壽　相摸太郎と稱す　人と爲り强毅不撓　幼にして騎射を善くす　弘長元年　將軍　北條重時が極樂寺の新第に入り　笠懸を觀る　特に命じて小笠懸を射らしむ　諸士能くするものなし　時頼曰く　太郎之れを能せんと　召して塲に上らしむ　時に年十一　馬に跨り出て一發して中つ　萬口齋く贊む　時頼曰く　此の兒我が家を承ぐ可きものと　從父長時に託し之れを視せしむ　十三　從五位下に叙し、



左馬權頭に任ぜらる

笠懸は知らず　小笠懸の古術に至ては　當時堪能のもの無しと傳ふ　然れども之れに參列せしもの鎌倉屈指の射手　而して時宗十一の小童を以て　一發して之れに中つ　彼れが天才は　既に此の時に顯脫せり　史の幼にして騎射を善くすと云ふは允れり　然れども　其の人と爲り强毅不撓と云ふに至ては　蓋し彼れが性行の結果を觀て　下だしたる斷案にして　其の素因に就き　深く精査したる論評にあらざるものゝ如し　乞ふ余をして其の源泉に溯らしめよ

業鏡高懸三十七年　一槌打碎大道坦然

是れ相摸太郎が父　最明寺の臨終に於ける偈にあらずや　最明寺の一生を通觀するに　慈仁春の如く　清廉水の如し　民の疾苦を視る　己れを傷む如く　草行露宿して猶治の擧らざるを憂ふ　民を治むるに親切なる

古今最明寺の如きものを視す　而して能く最明寺をして茲に到らしめたるもの　遠く之れを乃祖泰時の遺烈に稟け　而して近くは賢母松下禪尼と其の師蘭溪より得たり　遺傳と薫陶力の　相待て人を感化する斯の如し　是れ最明寺が　風　疎竹に來り風過ぎて　竹　聲を留めず　鴈　寒潭を度る鴈去つて　潭　影を留めず底の妙處に到達し　一槌打碎して大道坦然たる所以なり　而して最明寺の血液は　遺憾なく之れを時宗に傳へらる

子を視ること親に如かず　彼れが聰敏にして　文武の器を備へたるは時頼に因て證言せられたり　然れども彼れが器局宇宙を呑吐し　意氣斗牛を衝く底の膽勇は　其の先天的に於て然らざるものゝ如し　人は相摸太郎とし言へば　同時に其の膽力の雄烈を聯想し來るも　彼れが自著に係る「途の草々」てふ冊子を見るに　彼れは甚しく其膽の狹小を憂へ　之



れを除くに多くの苦心慘憺を費したるものなり　此れに因て之れを觀れば則ち　相摸太郎の弱點は膽の小にありし

人は必らず變化あるものなり　否な　其の豹變するを貴しと爲す　彼の吳下の阿蒙にあらずとの古語は　能く人の性情の變化を意味したる名言にあらずや　ナポレオンが　其の少時失戀の爲め　落膽したる所爲の如何に腑甲斐なかりしを視れば　豈に全歐洲を震撼する　大膽不敵の姦雄を認めんや　彼の時宗が「齡漸く長ずるに從ひ　心益々精　才愈々巧なるも　意氣柔弱恰も處女の如し」とは　誰れも豫想の外に出でん　然れども　彼れが柔弱處女の如く　常に怯弱を憂ひ　其の膽の小なるを苦にせしは　彼れが自筆に臆面もなく　之れを暴露せるを奈何せん

史の强毅不撓とは　時宗の剛斷果決　能く國難を雙肩に擔ひ　外寇を處理鹽梅したる手際の雄烈なりしを　總括したる批評ならん　然り　其の

時の時宗は　强毅不撓なりし　剛斷果決なりし　强毅不撓と言ふも　剛斷果決と言ふも　斯る抽象的の語は　相摸太郎時宗の半身だも撮影すること能はず

蓋し時宗の品性は　張子房に髣髴たるものなきにはあらざりしか　太史公子房を疑て　以爲らく魁梧奇偉　而して其の狀貌乃ち婦人女子の如し　其の志氣に稱はずと　余曾て肥後滿願寺に藏する處の　時宗の畫像なるものを見るに　唯洒々落々たる無念無想の一法師のみ　余も亦た太史公と感を同ふせずんばあらず　而して如此き時宗が　如何にして　膽坤維の如く　意氣斗牛を衝く底の　大豪傑となりしやは　頗ぶる面白く　且つ價値ある問題にして　余は之れを禪の力なりと言ふを憚らず

禪は之れを不立文字敎化別傳と稱す　佛敎中一種特殊の立敎にして　世界萬國未だ其の比類を見ずと云ふ　今禪の何物なるやを見るに先だち





其の敎外別傳の裏面　即ち敎家の敎相の一班を吟味せんとす　而して其の敎相を最も能く簡明に盡したるは　却て之れを緇流社會に求めずして白樂天が蘇州重玄寺の石壁經の碑を讀むを便なりとす　曰く

夫れ佛の知見に開示悟入し　了義を以て無窮に垂るゝは　妙法蓮華經より尊きはなし　凡そ六萬九千五百五言　無生忍を證し　不二門に造り、不可思議解脫に住するは　維摩詰經より極れるはなし　凡そ二萬七千九十二言　四生九類を攝し　無餘涅槃に入て　實に得度する者なきは金剛般若波羅密經より先きなるはなし　凡そ五千二百八十七言　罪を壞り福を集て　一切の惡道を淨むるは　佛頂尊頂陀羅尼經より急なるはなし　凡そ三千二十言　念に應じ順を願ひ極樂土に生んと願ふは、阿彌陀經より急なるはなし　凡そ一千八百言　正見を用て眞相を觀するは　觀普賢菩薩行法經に出たるはなし　凡そ六千九百九

十言　自性を詮して本覺を認るは　實相法密經より深きはなし　凡そ三千二百五言　法塵を空ふし佛智に依るは　般若波羅密心經より過たるはなし　凡そ二百五十八言　この八種の經は十二部を具す　合せて一十一萬六千八百五十七言なり　三乘の奏旨萬物の密藏盡せり

と　禪は乃ち以上の敎外に係る格段の性質を持てる敎理にして　釋迦牟尼成道の後四十九年　一日靈山會上にありて　華を拈して衆に示せり　在會の人天　皆な其の意を解する能はず　獨り摩訶迦葉ありて　破顏微笑せり　佛曰く　吾れに正法眼藏涅槃妙心あり　今汝に付囑す　汝當さによく護持すべしと　正法眼藏涅槃妙心即ち禪なり　禪の我が國に來るそれ何れの時にあるか　乞ふ之れを査察せん

釋迦牟尼の說く處　其の法八萬四千　要唯其の機に適ふに在り　之れを耶蘇が平等無邊一向專念　愛の一字を說くが如き　單純のものにあらず



漢來れば漢　胡來れば胡　漸あり　頓あり　權あり　實あり　融通無碍圓轉滑脫凝滯する處なく　大慈大悲　能く其の機其の根に應じて得度せしむ　是れを佛の本旨とす　奈良朝の時　華嚴俱舍三論最も其の盛を極む　而して華嚴俱舍三論漸く其の弊を生じ　執つて而して之れに代るものを天台眞言とす　是れを平安朝とす　物換り星移り漸く又其の弊を生じ　曾て王城の鎭護たるものをして　却て帝王をして山法師の歎を發せしむ　而して以て北條氏の世に及ぶ　凡そ宗敎として弊害なきはなしマホメットを問はず　バラモンを問はず　耶蘇の十字軍に於ける如きは最も其の慘劇を極む　豈に獨り佛敎のみならん　兎にも角にも佛敎が年所の久しき　日本化して　我が國體の光采を放ち　國民をして向上一段の靈光を認めしめたるは　耶蘇が歐洲を文明化したる功績に同じ　宗敎の要茲に於てか在り　泰時の烱眼能く之れを知る　而して又能く其の弊

を識る　曾て僧あり泰時に説くに一寺を建立すべきを以てす　泰時言下に之れを斥く　世の論者之れを以て泰時を佛法嫌ひと爲すは謬てり　何を以て之れを言ふや　泰時僧明惠を師として學ぶ　明惠泰時に誨ふるに「あるべきやう」の六字を以てす　曰く　君は君に「あるべきやう」臣は臣に「あるべきやう」父は父に「あるべきやう」母は母に「あるべきやう」子は子に「あるべきやう」夫婦兄弟朋友　夫婦兄弟朋友に「あるべきやう」と　泰時は執權なり　徒らに民財を糜し　無用の伽藍を建つ　是れ執權に「あるべきやう」の道なるか　是れ泰時の泰時たる所以にして　後世子孫　身　天下兵馬の權を掌握して　敢て臣節を守り　從四位下相摸守を超へざるもの　亦「あるべきやう」を利用せしに外ならず　而して彼れの「あるべきやう」が　如何に多く國民の精神を感化し　武士的氣質を涵養せしかは　之れを貞永式目に徴して　其の然るを首肯せざる可らず　苟も日本古代法を



研究せんとするものは　其の神髄を貞永式目に取らざる可らず　今當時の起草委員なるものを觀るに　王朝の故典に明かなる者と　僧侶と　當局者の三つより成る　達人達觀と云ふべし　今其の全部の箇條を通觀するに「あるべきやう」の外に出でず　而して首に敬神奉佛を掲げ　以て國體を明にしたる如きは　最も其の當を得たる處にして　異日元寇の變　鎌倉政府一令の下に　擧國一致外侮を禦ぎしもの　貞永式目預て力なくんばあらず　我が國人の忠勇は其の自然に出るも　國家感念と謹儉主義とは　貞永式目に依て最も多く之れを發揮せらる　而して當時武士的氣質の人士が　之れを形而上に得んと欲せば　之れを天台眞言に求む可らざるは　猶平安朝の華嚴倶舍三論に於ける如し　此の時新らたに禪宗來る　之れを齎らし還るものを僧榮西とし　次で歸朝したるを道元とす　前なるを臨濟とし　後なるを曹洞とす　均しく禪宗にして其の根を一に



伊記

す　曰く　禪は見性成佛　涅槃妙心と　氣鋒俊銳　活殺縱橫　妙　言說を離れ　一超直入如來地に達す　能く當時の武士的氣質に投合せり　道元の歸朝するや　時賴之れを鎌倉に延き　其の菩薩戒を受く　道元去つて越前に入る　蓋し入宋の時其の師に誓ひし言を蹈むなり　時賴乃ち西蜀入朝の僧蘭溪を幕下に致し　爲めに建長寺を創む　次で宋僧兀菴を入る　蓋し心要を鍊るの外　之れを帷幕に參與せしめ　外情を探らん爲めなりと言ふ　而して時宗に至り　外事漸く其の繁きを加へんとす　時宗乃ち　書を入宋の僧詮藏主英藏主に致し　名僧を迎へしむ　今彼れが自筆に係る文を觀るに　曰く

時宗、留意宗乘、積有年序、建營梵苑、安止緇流、但時宗每憶樹有其根、水有其源、是以欲請宋朝名勝助行此道、頗詮英二兄、莫憚鯨波險阻、誘引俊傑、歸來本國、爲望而已

弘安元年戊寅十二月廿三日

詮藏主禪師
英典座禪師

時宗和南





茲に於て祖元來る　即ち佛光禪師なり　亦乃父の遺意を採るに外ならず而して彼れが之れに依て得たるものは　當初期したる其れのものよりも甚だ大なるものを得たり　乞ふ徐ろに査察せしめよ

時宗を觀んと要せば祖元を觀るを要す　祖元は時宗の半身なり　否　其の全身なり　祖元は其の人忠孝　尋常の衲子にあらず　曾て溫州能仁寺に在るや　元兵南下し竟に溫州を侵し　祖元を捉らへ　刃を其の頸に擬す　祖元神色自若　乃ち偈を唱へて　曰く

乾坤無地卓孤節
且喜人空法亦空

珍重大元三尺劒　電光影裏斬春風

是れ全機電卷き　大用天旋る　赤手にして人を殺す　明頭來　暗頭來

佛もまた殺し　祖もまた殺す底の妙趣に達するにあらざれば能はず　祖元が大元三尺の劒の如き　是れ所謂ゆる衲家の茶常家飯のみ　時宗が元寇に於ける　亦是れ同巧異曲　而して其の玆に到る豈に夫れ容易ならんや　皮を得るもの未だ肉を得ず　肉を得るも未だ其の骨を得ず　骨を得るも未だ其の髓を得ず　時宗　藺溪兀菴の鉗槌を受け　又詮英二禪に從ひ　禪要を叩くも　未だ其の皮を得て肉を得ず　肉を得て未だ其の骨を得ず　骨を得て未だ其の髓を得ず　彼れは身執權として　國難を雙肩に擔ひ　戰を以て國論を一定するも　未だ彼れに於て安んずる能はざるものありて　二六時中此の憂念は去らざるものゝ如し　今彼れが祖元に於ける問答錄の一二を閲するに

欠

MISSING

て　曰く　今より三年の後　博多の地必らず騷擾せん　公謹んで煩惱する勿れと　先哲曰く　一忍以て百勇を支ふべく　一靜以て百動を制すべし　又靜を主とするの力は　千牛より大なり　十虎より勇なり　亦た徐ろに熟考して速かに決斷すと　祖元が所謂ゆる莫煩惱　乃ち是なるなからんや　時宗曰く　吾れ祖元大德の鐵槌を受け　人間至極の大寶を得たり　又天下の大と雖へども憂ふるに足らずと　彼れが其の茲に到るに幾多の苦心慘憺を經たりしやは　彼れが其の自著せる「途の草々」に之れを自白せり　今其の一班を叙せんに

（中略）殊に下臣どもの處置なり　言語の一層の邪魔となりて　心靜まらず　既に己れが念に貪着するが故に　益々念の息まざるを悟り　翌年の頃よりは餘程心も靜まり　行住座臥に心を奪はれぬ樣なりたり　尙務め行くうち　いつとなく心も晴れ鏡の如くなるを見　此處ぞと喜び

あくみて　又暫くの妄想起りて　一度晴れたる心も見へずなりぬ　更に又力めて漸々道に近づき　屢々禪師の公案を得鐵槌を得て　心膽の狹小なるを憂たる心の耻かしく　何故に凡夫を悲まざりしやを慨む

當時膽の狹小も打ち忘れて　又怯るゝもの一つもなかりき

膽量豆の如き時宗は　心氣一轉して　又世に怯るゝものなきの人と化せり

只箇一點無明焰　鍊出人間大丈夫

此の語能く時宗の眞相を描き出して　餘蘊なしと謂ふ可き歟

あら磯の波もえよせぬ高岩に

かきもつくべきのりならばこそ

禪の極意は　言說の相を離却す　所謂ゆる嶮崖手を撒し　絶後再蘇するにあらざれば　以て本來の面目を徹見する能はず　本來の面目とは何ぞ





六祖言はずや

菩提本非樹　明鏡亦非臺

本來無一物　何處惹埃塵

這個是れ阿誰ぞ　曾て名を知らず　身と爲すべきにあらず　心と爲すべきにあらず　慮らんと欲すれば慮り絶へ　言はんと欲すれば言窮る　痴の如く　兀の如く　山高く海深し　巔をあらはさず　底を露はさず　是れ我が主人公　本來の面目にして　名けて之れを言はば心なり　心とは何ぞや　既に心と云ふも亦た語弊に墮つ　孔子曰く　操れば則ち存し　舍れば則ち亡し　出入時なく　其の鄕を知らず　王陽明曰く　善なく惡なきは心の體　善あり惡あるは心の動　一休曰く　心とは如何なるものをいふやらん　墨繪にかきし松風の音と　禪の眞境は雙絶二體の關係を離れ　比較差別に亘らず　直下に自性を見透するに在り　是れ哲學と稍

其の趣を異にする處にして　通常一般の論理法に於て　如何に演繹し歸納するも　以て個の不可思議なる本體を認むる能はず　禪は乃ち哲學の向上一段したる眞境にして　哲學は禪の一部なりと言ふを得るも　哲學は即ち禪なりと云ふを得す

雨頭俱截斷　一劒倚天寒

是れ楠廷尉が湊川に於て得る處の　不可思議本體にあらずや　曰く　七たび人間に生れて　以て此の賊を滅さんと　兩頭俱に截斷し一超直入するにあらざれば　這裡の眞境に到達する能はず　兩頭俱に截斷す　是れ既知を以て未知を推斷する學理と自ら徑庭ある所以なり　祖元曰く時宗を棄去り來れと　余も亦言はんとす　方今學士論客雲の如く林の如し禪境に遊ばんと要せば　汝の學得を棄去り來れ　黃蘗曰く　百種の多知は無求最第一の道人なるに如かずと　古人吾れを欺かざるなり





夫れ大膽力は　生死岸頭(必ずしも劒花禪雨の修羅場のみを言ふにあらず)に立ちて　遊戲三昧を得るものにあらざれば得る能はず　何となれば無明の膽力は　是れ小人の勇疋夫の剛に過ぎざればなり　祖元の元難に處するや　電光影裏斬春風　曷ぞ其の洒々落々光風霽月の如くなりしぞ　豈に管獨り祖元のみならん　此の妙境に透達するものは　皆な盡く祖元なり　雪村友梅の斷頭場の露と化せんとするや　慫慂として祖元の偈を和して　曰く

百城水烟一枝節　觸目無非是幻空

童子曾參無厭足　鑵湯爐炭起清風

刑官感動し　爲めに元主に奏し　其の死を免ず　友梅は日本の禪僧なり王陽明の學は　禪學を骨として　之れを包むに漢學を以てしたるは　夙に識者の認むる處にして　蓋し其の膽勇禪に得たるものなり

王陽明の謫せらるゝや　劉瑾待つに死を以てす　路蹉塘を過ぎ　江に投ずる爲ねし　脱れて商船に附し　舟山に抵る　たま〳〵颶風大にをこり　夜　閩界に至る　岸に登りて山徑を奔ること數里　一寺を覓めて宿を求む　寺僧納れず　野廟に赴き香案に倚りて臥す　夜半　群虎廟を遶りて環行し　大に吼えて敢て入らず　既にして東天紅を告ぐ　寺僧　陽明が熟眠するを見　相共に驚いて曰く　公は常人にあらずと　迎へて寺に至る

此の一劇は　陽明を試むる好大學校にてありし　彼れは曰く　吾れ得失榮辱は皆な度外に付すべきも　唯だ生死の一念自ら省みるに未だ超脱すること能はずと　生死岸頭に立てる陽明は　此の好大學校に於て如何なるものを得しか　ロシフェール曰く　危險に遭遇せざる人は　未だ以て其の勇氣を保證する能はずと　然り　彼れの機智膽勇は確かに保證せられ





たり　然れども彼れば未だ大悟徹底に到らず　茲に於て　彼れは石を鑿ち榔を爲くり　夜々其の中に端座して　心界の靜一を求む　一夕大悟して曰く　聖人の道は吾が性中に自ら具備す　吾が前日理を心外の事物に求めしは大に誤れりと　是れその

險夷原不滯胸中　何異浮雲過大空
夜靜海濤三萬里　月明飛錫下天風

と　大喝破する所以なり

理を心外の事物に求めずして　直ちに性中に入つて　其の靈光を認むは取りも直さず　禪其のものゝ眞境にして　他の哲學の論理上　學んで而して其の旨を得るものと　自ら其の撰を異にする所以なり　入ては文　出でゝは武　善く隻手を揮つて國難を靖んじ　千古の大哲學者として　古今の名將として　芳名永く竹帛に垂るゝもの豈に夫偶然ならんや

時宗を以て陽明を視るに　其の地位經歷殆んど其の反對を走れり　陽明は幼にして母を喪ひ　繼母の虐待する處となり　身を終る迄流離關間暴露千里　概ね寧日なし　時宗は乃ち然らず　數代全盛を極むる執權北條氏の嫡子として　彼れの生るゝや天下の光榮を一身に擔ふて立てり　彼れが身邊を圍繞するのは　滿堂盡く是れ春風藹々彼れに佳ならざるはなく　復た一點肅殺　秋の何物たるを認めず　彼れが七才の時　將軍家の御前に於て元服せる狀況を見るに　彼れは此の世の寵幸を一身に擔ふて立てる　寧馨兒にてありし　弘長元年從五位下に叙せらる　歳十一文永元年連署となる　歳十四　同二年從五位上に叙せらる　同五年執權となる　歳十八　時宗の境遇坦々砥の如く　復た些の荊路を見ず　闇齋先生をして言はしめば　彼れは大不幸兒なり　彼れは大名の子に生れたり　而かも大名中の大大名執權職の家に生れたり　彼れを圍繞せる總て





のものは　彼れを馬鹿にす可く作られたり　然れども　彼れは此の四圍の大敵に打勝つ可く陶冶せられたり　彼れの家庭は　身　執權の光榮を擔ふも　彼れの祖母は彼れの父を戒めんとして　身自ら障子の繕ひを爲し　彼れの父は酒を侑むる好下物に　味噌を嘗めつゝ其の興味を感じたり　斯る賢明の父祖に依て薫陶せられたる彼れは　既に十一歳にして武將の子たる光榮を發揮し　醍溪兀菴に依て其の心要を叩けり　彼れの聰敏なるは陽明に髣髴たり　彼れは生死岸頭に立て猶膽の狹小を憂へり　陽明は得失榮辱は皆な度外に付するも猶生死の一念に於て徹底せざるを慨めり　陽明は石椰中に自ら大悟し　彼れは祖元の鉗槌に依て大事徹底せり　陽明は曰く　聖人の道は吾が性中に自ら具備す　吾が前日理を心外の事物に求めしは大に誤れりと　彼れは曰く　吾れ人間至極の大寶を得たり　又天下の大と雖へども恐るゝに足らずと　時宗不幸短命にして

死す　天若し陽明と壽を均ふせしめ　時宗をして陽明と其の境遇を同ふせしめば　彼れは獨り武事に於て大名を成すのみに止らざりしならん

聞く東鄉海軍大將　陽明に私淑し得る處多しと　其の作戰計畫の敏妙は措て問はず　所謂ゆる「やつけろ」を斷行し　世界海戰史上一異彩を放ち其の配下に幾多のネルソンを生じ　環海列國の視線を集注せしむるもの豈に其の故なしとせんや　ゲーデ曰く　大膽の中には妙力あり　只だ勇奮事を始めよ　其の事必らず成らんと　元寇の急を告ぐるや　時宗軍裝し　祖元に見へて曰く　大事到來せり　如何んが透得せん　祖元曰く　驀直進前と　時宗乃ち衣を振ひ一喝す　祖元曰く　獅子兒眞に善く哮吼すと　時宗が一喝は　踞地金毛獅子の如し　大機大用羅籠を脫し窠臼を出づ　虎の如く驟き　龍の如く奔り　星の如く馳せ　電の如く激し　天關を轉じ地軸を斡らし　沖天の氣を負ひ　格外の提持を用ふ　卷舒縱橫





殺活自在なり　國大と雖へども　兵衆しと雖へども　彼れ忽必烈我れに於て何にかあらん　俗中の眼中　其の無謀の如く見ゆる處　即ちゲーデの所謂ゆる妙力の潛伏する處にして　露も亦た恐るゝに足らざる所以なり

敷島の大和心を人問はゝ
蒙古の使斬りし時宗

是れ長州の豪傑村田清風の詩にあらずや　此の詩や　賴山陽が蒙古來の詩と相俟つて　久しく人口に膾炙し　人は相摸太郎とし云へば　必らず此の二詩と共に　彼れの魁梧奇偉を聯想してやまず　余も亦曾て多くの人と其の感を同ふせり　今や時宗の事蹟に就き　種々の方面に於て之れを吟味するに　余の感想は全く背馳し　以上叙し去り叙し來る如く　彼れは極めて聰敏なるも　其の先天的資質は　膽の小なるものにてありし

故に時宗を識らんと欲せば　彼れを兩斷して　先づ其の前半身と後半身を見るを要す　前半身は先天的時宗　後半身は修錬的時宗となる　之れを綜合して彼れの面目は　躍如として活現し來る　時宗の前半身は　智の人にして意の人にあらず　即ち智は事理を視るの明あると同時に　倍因氏が所謂ある「禍害を前知するの恐懼」の生じ來るは其の通弊たり　是れ時宗の自らその怯弱を憂ひ　工夫三昧に入りし所以なり　禪は哲學の所謂ゆる意の　向上一段したる靈境を意味す　祖元曰く　參禪は須らく是れ胸中を打併し　淨潔にして情識中の所重を去却し　單々に唯だ自己を將て參取せよ　自己既に自己ならば　なんに因て自己に參せん　蓋しなんぢ知見解會に　日夜差排し　日夜纏縛せらるゝによつて　解脫を得ること能はず　出頭を得ること能はず　此れはこれ第一種の牢獄なり　なんぢ若し許多の知見解會を去り得て　空蕩々處に參し　虛豁々處に行せと　時宗が病處を指す　恰も肺肝を見る如し　是れ時宗の一種の牢獄を脫却し　出頭を得んと欲する處なり　時宗刻苦精勵　竟に此の天關を超越して　天上天下又恐るゝもの無きに至れり　是れ余が所謂ゆる後半身の時宗にして　善謀善斷忽必烈を手中に翻弄し去り　能く我が金甌無缺の國を全ふせし所以なり　ペンザム曰く　勇なるものは社會の精神なり國家の守護神なりと　余はペンザムの言を三誦して　之れを法光寺殿果公大禪定門の御前に手向んと欲す

而して　時宗と共に想ひ出らるゝは　彼れが師祖元の事なり　祖元は即ち圓覺寺の開山佛光禪師なり　禪師が風采如何は　人の知らんと欲する處ならん　左に澤庵和尙が「順禮鎌倉日記」を拔萃して讀者に示さん

次の日は圓覺寺に入り　開山佛光禪師を拜するに　所から常ならず仙境やかくあらんと覺ゆ　塔樣殊勝なり　慈顏うるはしく　活ける人

にむかふ如くなり　いかなる屈强の人も泪をもよほす計なり　野鳥來りて肩になれ　白龍けさに現すと傳へしが　在世の有樣をうつし　椅子に白き鳩二とまり　けさに白龍をきざみそへたり　實に　谷虛にして山をのづからこたへ　人無心にして物よく感ず　芭蕉耳なくして雷をきゝ　磁石無心にして鐵を感ず　無心の心　いくばくぞや　云々

更に禪師が　自畫自賛の像を見るに

者俗漢無眼目、不怕人罵、只怕人觸々々、懽喜花柳春風、惡發天翻地覆、有來由沒拘束、優曇花正開、岩々遠山綠

弘安七年九月三日

無學翁書于得月樓

澤庵の筆と祖元自身の賛によりて　彼れが如何なる屈强の人も泪をもよほす計の慈顏にして　而かも能く安禪毒龍を制す底の風采を想見し　當





時彼れと時宗と相得るの如何を偲ばしめずんばあらず　祖元の元寇に大功績あるは永く沒すべからず　而して　世日蓮を識て　祖元を識らず

元寇と日蓮　時宗と日蓮は　余が後章に於て論せんと欲する處なり

古人曰く　凡そ人　言語正さに快意に到る時　便ち截然として能く忍默し得　意氣正さに發揚に到る時　便ち翕然として能く收歛し得　忿怒嗜欲正さに沸騰に到る時　便ち廓然として能く消化し得んこと　此れ天下の大勇なるものにあらざれば能はずと　我が武士道を得るものは如上の關門を透過して　死を視る還るが如し　是れ毛唐人の泣く處　歐米人の驚く處なり　何を以て然るや　我が國人の　上に忠に　下に慈に　事に當て進んで避けざるの性は　是れ我が建國の重寶たる　三種の神器の性命を稟受し來るに因る　夫れ鏡は智なり　璽は仁なり　劒は勇なり　智仁勇此の三つのものゝ自然陶汰して一種の美德を成せるもの　之れを名

けて大和心と云ふ　藹然掬す可く　儼然侵すべからず

みよし野の　春の曙　來て見れば　もろこし人も　高麗人も　大和心

になりぬべし

佛の所謂ゆる　大乘に適する國民なり　而して其の自性清淨三昧に因て

大和心を錬磨し得たるもの　之れを名付けて武士道と云ふ　而して其特

に武士道と云ふは　鎌倉に始り　江戸に大成し　以て明治の盛世に及ぶ

西郷南洲は維新の大立者なり　而して彼れが運謀參畫皆な無念無想より

來る　是れ震天撼地の大業を成す所以にして　彼れは其の旨を特に鹿王

院義堂に得ると云ふ　勝海舟が其の非境に立て　莢開いて豆墜ち　水流

れて渠成る底の手腕を揮ひ　能く德川氏の祀りを絶ざるもの　亦た無念

無想の妙より脫化し來ると云ふ　日清の役　斷然還遼の策を建て　列國

容喙の端を塞ぐ　是れ陸奥福堂の力なり　彼れが禪機は剃刀にして　金



剛王寶劒を揮ふの手腕なしと雖へども　亦た禪味なきものゝ企及すべか

らざる處なり　禪と武士道　余は國家の汚隆泰否に關し　其の一消一長

容易ならざるものあるを感ず　それ陸奥の禪は父自得に得るもの多し

その長顏瘦軀鶴の如く　霞關門前に屹立する彼れが銅像に對し　今昔の

感に堪へざるものあり　嗚呼陸奥逝てボーツマスの事あり　後ちの外相

たるもの　少くも陸奥其の人の如きを望むや切なり

夫れ鐘は懸に在り　叩て而して聲出づ　聲は叩くを待て後ち出づるにあ

らず　石は山に在り　擊て而して火發す　火は擊つを俟て後ち發するに

あらず　大和心も亦た然り　謹で今上陛下の御製を拜讀するに

敷島の大和心の雄々しさは

事あるときにあらはれにけり

と　元來れは元殺し　淸來れば淸殺し　露來れば露殺す　此心以て永く

列國に對峙して　皇威を四表に宣揚することを得ん　聞く河野通有　元虜の無狀を怒り　其の領土の神に禱るもの年あり　一朝出征の命下るや日頃の念願此の時に達せりと　奮鬪虜艦に斬入り　竟に虜將を生擒し還ると　嗚呼河野通有の心　即ち是れ明治三十七八年の心なり　十年鬱屈せる慷慨悲憤の氣は　恰も百川の一時に決する如し　旅順仁川の一擊　忽ち制海の權を制し　進んで遼陽を屠り奉天を陷るもの此れが爲めなり惜らくは　局に當るもの其の人を得ずして　廟算徒らに利害の末に走り屈辱を外交史上に留めしは（余が著外交失敗史に就て見るべし）識者の歎惜して措かざる處なり

余は玆に於て　益々時宗其の人を想ひ　斯道の砥礪せざるべからざると同時に　禪の參究せざるべからざるを感ぜずんばあらず





# 第三章　時宗と恕必烈

## 頼山陽の元寇論

鐵木眞以來傳家の筆法——最初の牒狀第二の牒狀

龍の口の斬首——恕必烈が雞助の情——時宗は山陽が云ふ如く宋の事を知らざるものにあらず——時頼と蒲溪尊氏と夢想家康と天海——門外漢の日蓮——當初局に當るものゝ優柔不斷の罪——祖元が裁多の鉗槌を得て始て膽褻の如くなりし——何を書ふべきかを躊躇すべき時にあらずして何を爲すべきかを決定すべき時なり——菅原氏草する處の答案——百の胡濟菴と千の陸秀夫文天祥——櫻井中尉の所謂ゆる肉彈——露の東洋艦隊司令長官マカロフと海軍戰術論——我邦の萬國に冠絶して異彩を放つものは斯の道あるが爲めのみ——恕必烈と露と同巧異曲——時の當局者が怯懦にして無事を希ふ姑息心——近衛霞山公と國民同盟會——射劍を忘れざるは人の

●情――●我●れ●は●早●晩●彼●れ●が●感●謝●を●受●く●る●の●日●あ●る●を●覺●悟●せ●ざ●る●べ●か●
●ら●ず――●近●く●ば●波●斯●の●革●命――●山●は●月●樓●の●鐘●に●應●ふ●



千古無比の桀驁忽必烈が　西歐東亞を蹂躙したる餘威に乘じ　手もなく一眥めに眥め取らんとせし大和島根は　屹として拔く可くもあらず　洞悟又懷柔　手を換へ品を代へし猫撫聲も　最早や彼れの堪へ得る處にあらず　竟に豺狼饜くなきの本性を露はし　舳艫千里　旌旗空を蔽ふて來る　實に弘安四年閏七月一日なり

賴山陽　此の事を論じて曰く　當時廷議　宋の君臣の如く　苟も近き禍ひを免れて　其の後ちを恤へず　兵民の心も亦た宋の將士の如く　敢て防禦に決せず　時宗の如きは　則ち未だ宋の事を知らずと雖へども　而かも能く慮り此れに及ぶ　所爲らく早く之を絕ち　以て其の來るを速くの防ぎ易きにしかずと　是れを以て其の使を斬り　以て悞れざるを示し



以て彼れが前日の寇辱に報ひ　而して　我が後日の守心を決す　誰れかこれを謀慮なしと謂はんや　吾れ以爲らく　宗廟の靈　時宗の衷を誘ひ以て此の計を決す　颶風にあらざるなり」と　蓋し蒙古の我れを窺ふ一日の淺きにあらず　後一條天皇寬仁三年對島壹岐を侵すに始り　後伏見天皇正安三年に終る　此の間　凡そ三十二年矣　忽必烈が　趙家の老寡婦を嚇し得たる慣用手段を以て　直ちに之れを我れに擬せり　彼れ其の心必らず奪はずんば饜かず　之れを先んずるに懷柔を以てして　其の目的を遂げずんば　之れに次ぐに威嚇を以てす　威嚇猶其の目的を達せずんば　最後の手段を以て之れに訴ふるは　是れ彼れが祖鐵木眞以來傳家の筆法なり　文永五年戊辰春王の二月　彼れが齎らし來る處の牒狀を見よ

大蒙古國皇帝　書を日本國王に奉ず　朕惟るに　古より小國の君　境土相接するものは　信を媾じ睦みを修むるを務む　況んや我祖宗　天

の明命を受け　區夏を奄有す　假方異域威に畏れ德に懷くもの數ふべからず　朕即位の初め　高麗無辜の民久しく鋒鏑に瘁むを憫み　即ち令して兵を罷めしめ　其の疆域を還へし　其の旄倪を反へせり　高麗感戴して來朝す　義は君臣と雖へども歡ひは猶ほ父子の如し　計るに貴國も亦た既に之れを知らん　高麗は即ち朕の東藩なり　貴國之れに密邇し　開國以來時々中國に通ず　朕の躬に至て　曾て一乘の使を以て和好を通ずる無し　恐くは貴國之れを知るの未だ審かならざることを　故に特使を遣り書を持し朕の志を告ぐ　冀くは自今以往　問を通じ好を結び　以て相親睦せん　且つ聖人四海を以て家と爲す　好みの通ざる豈に一家の理ならんや　兵を用ふるに至ては其れ熟れか好む處ぞ　王それ之れを圖れ

兵を用ふるに至てはそれ熟れか好む處ぞと　末段忽ち聖人の假面を剝ぎ





去り　夜叉の鋒芒を露はし來る　時宗其の無禮を怒り斥けて受けず　茲に於て彼れは再び牒使を發せり　其の略に曰く

王者本と外なし　高麗既に一家となる　貴國實に隣境たるを以て　嘗て信使を遣り好みを修めしむ　而して貴國遂に答ふる處あらず　故に復た特使趙良弼をして促さしむ　貴國答使を發せば是れと共に來れ

仁に親しみ隣に善くするは國の美事とす　若し或は猶豫せば　兵を用ふるに到らん　敢て好む處にあらず

或は猶豫せば兵を用ふるに到らんと　彼れが喧嘩腰は一歩を進めり　時宗及ち良弼を逐ひ還す　曰く　重て來らば一人も生還を得じと　然れども腹黑き忽必烈は　平然自若猶ほ懷柔の方針を捨てず　更らに杜世忠等を遣はし　我れに處決を促がす　時宗輙ち之れを鎌倉に致し　龍の口に斬る　是れ山陽が「早く之を絕ち以て其の來るを速くの防ぎ易きにしか

すと論じ　力を極めて時宗を讃歎せる處なり　當時の覺書を見るに

後宇多院建治元年乙亥九月七日於龍口刎首

一　中須大夫禮部侍郎　杜世忠

二　奉訓大夫兵部郎中　何文著

三　承仕郎回々　都魯丁

四　書狀官薫畏國人　果

五　高麗諱語郎　將徐

今度首を刎る事　永く寇讎を絶ち　攻む可らざるの策なり　其の後ち警固の事あらば　鎭西に沙汰し　守護人の器用なるを撰補し　海邊の國々に發達す　京都の大番役を止め　左京の人を差置かる　公家武家公事を減省し儉約を行ひ民庶を休めしむ　皆な是れ軍旅の用意を爲すもの也





忽必烈が鷄肋の情は　之れを捨てんと欲して捨る能はず　茲に於て　彼れは兵艦を準備し　其の黑き鐵の手に猶ほ温き天鵞絨の袖を包み　以て我が再思を促がす　茲に於て時宗は　復た彼等を鎌倉に致すの用を見ず直ちに之れを博多に斬る

弘安二年己卯

今年六月廿五日　大將軍夏貴范文虎　使周福蠻忠　渡宋の僧本曉房靈果　通事陳光等を相具し着岸す　牒狀の旨前々の如し　博多に於て斬首す

彼れは我れを致さんとして我れに致され　彼れは挑發せんとして我れに挑發せられ　彼れの忿怒は烈火の如し　夫れ兵怒るものは敗る　兵驕るものは敗る　今や忽必烈の兵　大國を恃んで我れを呑み　其の氣甚だ驕れり　而して加ふるに忿怒を以てす　既に驕り且つ怒る　勝敗の數豈に

戰を俟て後ち知らんや　嗚呼此膝一たび屈せば復た伸びず　憶ふて玆に到る　安んぞ天斯の人を降し　以て我が皇國を祐け玉ふにあらざるなきを知らんや　古哲曰く　造化人事皆な靜を以て主と爲す　造化　專一翕聚にあらざれば　則ち直遂發散する能はず　人心　寂然不動にあらざれば　則ち何を以て天下の萬事に酬酢せんやと　然り　時宗の謀慮は禪家の所謂ゆる不動智より得たり　明鏡止水　事に當て善く斷し善く謀る必ずしも宋の事を知ると知らざるとに關せず　然れども彼れは山陽が云ふ如く　宋の事を知らざるものにあらず　蓋し蒙古の我れを窺ふ曾に時宗の時に始まるにあらず　彼れが對島壹岐を侵し　以て我が鼎の輕重を問はんとせしは　其の父時賴の時代に在り　恰も禪僧道元宋より還る時賴之れを幕下に致し　彼れを以て黑幕宰相と爲さんとす　道元道骨稜々去つて越前に入る　玆に於て時賴蘭溪を迎へ　又兀菴を延き　之れを





帷幕に參す　蘭溪兀菴共に宋人也　而して彼等二人の人となりを見るに儒佛其の道を異にするも亦た朱舜水の徒にして　深く其の祖國の衰亡を慨嘆するものなり　蓋し時賴の蘭溪兀菴あるは　尊氏の夢想に於ける家康の天海に於ける如し　運謀參畫蓋しこれより出づ　雄僧日蓮曾て蘭溪に師事し　其の筭籌の勞を取り　略ぼ外情に通じ　彼れは布敎の大骨子として獻國襲來を唱へり　是れ彼れ日蓮は仁王經藥師經に據て之れを唱へりと云はんも　亦た實際蘭溪に得るものなくんばあらず　門外漢の日蓮にして猶ほ然り　況んや時賴をや　況んや時宗をや　時宗の時に至ては　外事愈よ急を訴ふ　時宗即ち詮藏主英藏主二禪に命じ　更らに第二の黑幕宰相を拉し來らしむ　是れ即ち時宗の半身祖元なり　祖元は現に元兵の爲め其の首を刎ねられんとせしもの　元の谿壑饜くなき野心を知るや　蘭溪兀菴に優る　祖元時宗を誡めて曰く　今より三年の後　博

多の地必らず騷擾せん　公謹んで煩惱すること勿れと　夫れ崖山の妖血は祖元に於て猶ほ其の腥きを忘るゝ能はず　陸秀夫の勇　文天祥の忠空しく天地間正氣の歌を留めて　宋の社稷の亡ぶる所以のもの　優柔不斷の罪に在り　陸秀夫も文天祥も　唯だ其の肝腦を塗つて社稷に殉するに過ぎず　祖元善く之れを觀破し　佛心印と共に之れを時宗に誨ふ　是れに因て之れを觀れば　山陽が「時宗の如きは則ち未だ宋の事を知らず」と雖へども　而して能く慮り此れに及ぶ」と云ふは　未だ盡さゞるものに似たり

杜舒晦善く謀り　房玄齡善く斷ず　唐の天下を得たるは此の二人の力に由る　蓋し善く謀るものは善く斷せず　善く斷ずるものは善く謀らず善謀善斷之れを兼るものは　世甚だ鮮なし　時宗の聰敏なる能く蒙古の野心を看取し　山陽が「早く之れを絶ち以て其の來るを速くの防ぎ易きにしかず」と謀る如きは　固より祖元の容喙を俟たずして既に成竹ありしならん　然れども之れを斷ずるの一事に至りては　實に祖元が幾多の鉗槌を得て始めて膽甕の如くなりしは爭ふ可らざる事實なり　蓋し天時宗の衷を誘ひ　以て斯人を降だし　我が皇國を祐くるにあらざるなきを知らんや　嗚呼此の時は如何なる時ぞ　將軍アンニュスが所謂ゆる「今は何をか言ふ可きかを議定すべき時にあらずして　何を爲す可きかを決定すべき時」ならずや(ロトマ史論參觀)　然るに廷議　宋の君臣の如く　唯だ何をか言ふ可きかを憂ふ　時宗微せば　余は恐る菅原氏草する處の答案は必らず國書となりて　忽必烈の手中に落ちんことを　事茲に到ては　既に一籌を輸す　假令ひ秦獪王倫の徒にあらざるも　事機既に逸したる後ちの決斷は　徒らに百の胡澹菴を生じ　千の陸秀夫文天祥を出して　我が豐葦原は　空しく妖血の汚す處とならん　然るに時宗が決意の堅きは

羅針盤の北斗を指す如く　斷々として疑はず　其の牒狀を斥け　其の使者を斬り　曾て忽必烈が書く處の意表に出づ　茲に於て闔國の士戰はず　して而して自ら振ふ　嘉永安政の際天下鼎沸　而して幸に列國の制肘を免れ　日露の葛藤能く北方の强を制す　嗚呼其の氣魄精神　何れの血管より傳はり來る　曰く　武士道より來る

年毎に咲くや吉野の山さくら
木をわりて見よ花のありかを

余　櫻井中尉の「肉彈」なる書を讀み　此の心の以て堅甲利兵を壓し　此の精神の以て金城鐵壁も防ぐ可らざるを歎美せずんばあらず　而して此の心此の精神は　一朝一夕になるものにあらず　露の東洋艦隊司令長官マカロフは　世界有數の名將なり　彼れが著書「海軍戰術論」を讀み　其の着眼の平凡ならざるを知れり　彼れは軍人の精神的涵養を論じて　曰く





第一　如何なる難局の出來する事あるも　曾て躊躇する處なき機智を以て處斷する事

第二　剛毅果斷

第三　危急存亡の時に臨んで　冷靜なる判斷力を有する事

と　如何にも彼れは其の著に論ずる處に耻ぢず　其の艦隊と天晴れ見事の戰死を遂げり　然れども往古の蒙古民族と伯仲なき　殘暴殺を嗜むスラブ民族の如きは　固と是れ小乘的の民種　マカロフ論ずる處の如きは口能く喩す可くも彼等を涵養して此の器を成さんとするは難し　曰く「如何なる難局の出來する事あるも　曾て躊躇する處なき機智を以て處斷する事」之れを言ふは易し之れを修養するは難し　曰く「剛毅果斷」之れを說くは易し之れを修錬するは難し　曰く「危急存亡の時に臨んで冷靜なる判斷力を有する事」之れを論ずるは易し之れを陶冶して茲に到

らしむるは難し　東洋艦隊の敗滅と云ひ　バルチック艦隊の全滅と云ひ
一つに精神的涵養如何の戰爭にして　堅艦巨舶の數に關せず　是れ精神
的涵養は　一朝一夕に成るものにあらず　而して之れを涵養するも　亦
た言説の相を離れ　以心傳心の妙を得て　而して後ち始めて其の光芒を
發揮し來る　嗚呼堅艦巨舶は俄かに或は造るを得ん　然れども此の心は
蓋し百千年の涵養を待つにあらざれば得可らず　マカロフ眼茲に注ぐ
余は其の志を壯として其の心を悲むものなり
以上　マカロフ論ずる處は　軍事的意義に之れを解釋したるものなり
而して我が國の所謂ゆる武士道なるものは　無事にして文　有事にして
武　武と云ふと雖へども　必ずしも軍事的意義に局促すにあらず　威武
も屈する能はず　富貴も淫する能はず　貧賤も奪ふ能はず　此の心即ち
是れ武士なり　而して此の心を砥礪する道を武士道と云ふ　我が邦の萬





國に冠絶して一異彩を放つものは　斯の道あるが爲めのみ
武士道に貴ぶ處のものは　其の氣節にありと雖へども　必ずしも其の剛
を取らず　情け深きを其の美德とす　自由　博愛　固より其の中に含蓄
す　秋毫も他の權利を侵さず　藹然親む可く　儼然侵すべからず　我が
邦之れを以て坤輿に立ち　又之れを以て列國に望めり　何事ぞ露の如き
自由博愛の大義に背き　廿世紀の今日に在て　六百年前既に手を燒きし
忽必烈の跡を追ふて　其の覆轍を踏まんとは　露の爲す處を觀るに　一
つも彼巳氏に似ざるものなし　試みに彼れが我れに加へし恫愒的牒狀を
見るに　何ぞ其の相似るの甚しきや　曰く
遼東半島を日本に有することは　曾に常に清國首府を危ふする恐れあ
るのみならず　是れと同時に朝鮮國の獨立を有名無實と爲すものにし
て　右は將來極東永久の平和に對し障害を與ふるものと認む

と　外面に自由博愛を表し內心は鎔壑靡くことなき野心を包藏す　恰も怒必烈の口に聖人を唱へ　手に干戈を把て我れに見えんとするが如し

而して　事に觸れ機に處し　年を追ふて次第に其の毒牙を露はす處も亦た同巧異曲　而して時の當局者は　露を以て始より恐る可きものと視　一目を彼れに輸し　下手に出て丶事なきを願へり　是れ時の當局者が怯懦にして　無事を希ふ姑息心之れをして然らしむるものにして　日本人一體の心にあらず　蓋し毛唐人十人日本人一人の割合は　必ずしも豐公征韓の時に發揮せし元氣にあらずして　遠く之れを神功の朝に於て確認せり　奈良朝の時　隨に通ず　隨の大榮三年隨主國書を我れに致せり　其の文に曰く　日出處の天子羔なきや　日沒處の天子書を致すと天皇御覽じ玉ひて　天に二つの日なく　國に二の王なし　日沒處の天子とは何者ぞやと　嗚呼此の獨立自尊の心　即ち日本人が年所の久しき





之れを切し之れを磋し磨ぎ上げたる一段の心にして　君主慈仁　臣民忠勇　凝て百鍊の鐵となり　發して萬朶の櫻となり　此の精華を集めて一團となし　以て我が金甌無缺の國を守る　嗚呼誰れか得て之れを侵さん時宗毛唐人に依て之れを發揮し　近くば又日露の交戰に依て其の光采を放てり　芙蓉の山　東海の水　流峙依然たり此の形勝　逝くものは水の如く去つて還らず　余は玆に於て　近衛霞山公を追想せざる能はず

先哲曰く　輿論は時として法律よりも大なる力を有し　一層完全なる服從を强ゆと　余　日露折衝の際に於て深く此の言に感ずるものあり　公華冑の身を以て親しく滿洲に遊び　深く不毛の地に入り　其の瘴癘の氣を侵し　露國の爲す處日に其の非なるを觀破し　慨然として禁ずる能はず　其の歸朝するや國民同盟會を提げ　滿腔の熱血を當路に灑いで曰く今や滿州問題は　實に一髮千鈞の危機に瀕せり　露國にして强て滿洲條

約を締結せば　其の行動既に列國の伍伴を脱す　日本も亦た宜しく列國協同に願慮する處なく　進んで露國に當る可しと　警鐘一たび鳴て　朝野響應し　口に筆に倔起して當路の處決を促がせり

茲に於て政府も亦た大に決する處あり　折衝又折衝　竟に宣戰の詔勅を拜するに至るもの　公の力預つて力なくんばあらず　惜むべし　公は之れが爲め二兒旨膏に入り　復た起たず　若し夫れ公をして猶ほポーツマスの時にあらしめば　亦た卓厲風發能く政府を警醒し　如此き屈辱を取らざらしめしならん　ワトキンス曰く長く生きんと望まず　善く生きんと望むべし　吾人の生命の長短は　年を以て算せず行爲を以てすべしと

余は此の言を三誦して　之れを近衛公に手向けざるを得ず　夫れ時宗は三十四歳にして逝き　公亦た僅かに强仕に達して而して薨ず　天の斯人を奪ふ何ぞそれ速かなるや　是れ天　時艱を救ふ爲め　暫らく斯の人を





此の土に借すものなる歟

今や攻取の情は化して魚鳥も亦た來り相親む　悖戾の氣銷して　又世途の畏るべきを見ず　昨の敵　今の友　是れ天地間一大劇場たる所以にして　花を落すの雨は　知らず　是れ花を催すの雨なるを　然れども記憶せよ　射鈎を忘れざるは人の情なるを　復讎の念は血管を傳はりて滅せず　深く其の心地に印す　弘安の役　忽必烈志を時宗に得ず　是れを以て其の子志を繼ぎ　猶ほ邊海に寇するもの貞時の世に及ぶ　蒙古にして筑紫の怨みを忘れず　佛にして獨に對する感情を去らずんば　露國も亦た滿洲の事を忘れざる可きは　理の覩易き處にして　我れは早晩彼れが感謝を受くるの日あるを覺悟せざる可らず　今や滿洲鐵道は經營せられんとす　是れ彼れの夙に爲さんとする處　今ま其の着々事業の進捗するを見ば　是れが露國たるもの豈に懷に快たらんや　苟も時機にして捉ふ

べきあらば　直ちに手を伸ばして　其の不凍港を回復せんとするや疑ふ可らず　此の侵略的行動　是れペートル以來　露國の奉じて以て其の性命となす處にして　百世之れをかへず　之れを大露西亞主義と名づく彼れを知り己れを知らんとするものは　必らず之れを知らざる可らず曰く如何にして之れを知らん　亦は浩瀚なる露史を繙くの煩を須ひず直ちにペートルの遺詔を讀め

是れ露國が錦囊に盛れる秘書にして　世々傳へて之れを御遺詔と云ふ眞僞未だ知るべからずと雖へども　之れを露が世々其の拓土開疆に力を致す侵略的行爲に徵せば　彼れ焉んぞ痃さんや　彼れ焉んぞ痃さんや眼を放つて露國の爲す處を見よ　波斯の革命は如何　是れ明治四十二年七月中の出來事にあらずや　聞く同國皇帝は露國公使館に保護を乞ひ政權既に露の掌中に歸し　英國は英露協約に依りて之れを默々に付せり





と　露國が南下の志を翻へさゞる如此し

我邦先きに元寇の事あり　而して後ち　日露の難あり　自今以後　復た此の不祥を觀るなく　千秋萬歲　永く干戈を止め　武の武たる本領を發揮し　四海億兆をして盡く平和の光輝に浴せしめん

諺に曰く勝て兜の緒をしむと　嗚呼吾人は何を以て露國を待たん　曰く山は月樓の鐘に應ふ　吾人は固より敵意を以て露國を待たず　是れ我が大和民族の酒々落々たる襟懷にして　平和の外　英なく　佛なく　米なく露獨なし

# 第四章　時宗と日蓮上人

日蓮の膽勇と手腕とは時宗に減ぜず——彼れは無冠の帝王よりも寧ろ執權其のものに戀々たるもの——一つの青砥藤綱の位地——日蓮の尊き所以は形而上の乾坤に霸氣を洩らしたるに在り——身延山頭雲白く山青き邊——法華經六萬九千五百五言中唯此の四文字我は釋尊の再來也——念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊——日蓮が法界に覇を成さんとするは猶ナポレオンが世界の封建を破らんとする大志の如し——日蓮の立正安國論——野頭第一鎌倉執權に向て洗禮を行はんとす——獻國來寇の豫言は弘法の大骨子にして日蓮の死活問題——日蓮誓て泉涌寺に腦溪に從ひ筆幕の勞を取り爲めに外情を知るこを得たり——日蓮の獻國來寇は元寇に於て殆んど無意義に屬し何等の功德なし——僅かの天照太神正八幡——日蓮が眼中大日本帝國なく唯一の法華經あるのみ——龍の口の御難——宗門弘通の免許狀——日蓮時宗を容れず而して時宗善く日蓮を容る——執權の家に生れずして穢多の子に生る——身延山頭に秘め置ける深密傳——彼れは憤りを以て身を起てり故に彼れは身を終る迄之を冷却せざりし——親鸞正を用ひ日蓮奇を用ふ——大菩薩の三字を拈して日蓮をかつぎ揭げんとす





余は日蓮を多とす　其の膽勇を多とす　其の手腕を多とす　日蓮のきび々々したる膽勇と　峻烈なる手腕とは　敢へて時宗に減せず　若し膽勇を以て無鐵砲の意義を包含するを多とせば　彼れの膽は時宗より大なり彼れをして執權たらしめば　時宗の爲す處を爲し　活潑々地　震天撼地の大活劇を演ずるや必せり　日蓮の性行を觀るに　彼れは何事をか爲さずしては往生する能はざる底の漢なり　而して彼れは無冠の帝王よりも

寧ろ執權其のものに戀々たるものなり　憐むべし　彼れは蜑村漁落の子弟　彼れをして歐洲に生れしめばいざ知らず　彼れが境遇の壓力はナポレオンたるを得ず　執權たる能はず　己むなくんば一つの靑砥藤綱の位地あり　而して彼れの大志は到底藤綱に甘んずる能はず　是れ彼れが形而下の浮き世を斷念し　形而上の乾行に横行濶歩して　一旗幟を立てし所以なり

彼れが滿幅の精神は　形而上の乾坤に集注したり　而して其の形而下即ち浮き世の事に關し　所謂ゆる八面鋒天下に咆哮し　蒙古襲來を警告するが如きは　日蓮に在て一つの手錬手管に過ぎず　日蓮の尊き所以は形而上の乾坤に覇氣を洩らしたるに在り　是れ日蓮の日蓮たる所以なり　然るに日蓮を識らざるもの　其の佛法を以て王法に適用したる功德を唱へ　筑紫の颶風に隨喜の泪を浮ぶる如きは　愚も





亦甚し　身延山頭雲白く山靑き邊　日蓮をして此の徒の說を聞かしめば即ち如何ん　桃李言はず下もおのづから溪を成す　彼れは唯笑ふて而して答へざるのみ

日蓮が博聞彊記は天下多く其の比なかるべし　彼れは叡山に遊び天台の奥義を極め　次て南都に遊び　三井寺に遊び　高野に遊び　凡そ佛典として通せざるなく　更に京都に遊び禪を學ぶ　而して彼れの據る處の敎理は法華經に在り　而して彼れの執る處の眼目は　未見眞實の四文字に在り　是れ彼れの金城湯池なり　法華經六万九千五百五言中　唯此四文字を執へ來つて　一天四海妙法に歸せんとす　是れ花を拈して丈六の金身を作るの筆法　日蓮の膽勇　日蓮の手腕にあらずんば　天下豈に耳を傾くるものあらん　彼れは更に法華經に就き　慈覺を以て其の眞義を謬るものと論破し　玆に新たに南無妙法蓮華經の題目を陣頭に押立て　彼

の未見眞實を利用すると　同筆法に依り　二千五百歳後云々の佛の豫言に徴し　天下に呼號して曰く　我は釋尊の再來也　我れは法華經の行者也　曰く日蓮に怨みをなさんものは必ず無間地獄に墮つ可し　曰く　日蓮は日本國の柱石也　我れを失ふは日本國の柱石を倒す也と　日蓮が法界に覇を成さんとするは　猶ほナポレオンが全世界の封建を破らんとする大志の如く　其の自任の高き殆んど當る可らず　曰く　念佛無間　禪天魔　眞言亡國　律國賊と　當時彼れが辻説法に　松葉ヶ谷に　龍の口に　其の所信を説破し　其の所信を斷行して　泰然自若須彌山の如くなりしかを追想せば　誰れか畏敬の念を起さゞらんや

余　日蓮の立正安國論を讀み　彼れが大膽にして胸中無數の權度に富めるを驚かずんばあらず　其の水損旱損を説き　天災地殃を論じ　敵國來寇を豫言し　亡國を説破す　堂々數千言一つに皆な法華經を奉ぜざるの





罪に歸し　之れを證するに仁王經藥師經等を以てし　劈頭第一鎌倉執權に向て洗禮を行はんとす　是れ彼れが滿腔の熱血を灑ぎ　立正安國論を草し　時賴に致したる所以なり　時宗執權となるに及び　彼れが敵國襲來の豫言は端なく事實として現はれたり　此の時に當り　朝野恟々　天子憂惶　禱祀虚日なし　彼れは乃ち時宗に書を致して　曰く

謹んで言上せしめ候　抑も正月十八日　西戎大蒙古國牒狀到來　日蓮先年諸經要文を集めて之れを勘へ　立正安國論の如く　少も違はず符合す　日蓮聖人一分に當る未萠を知るが故なり　然る間重て此の由を驚し奉る　急に建長寺　壽福寺　極樂寺　多寶寺　淨光明寺　大佛殿寺の御歸依を止めよ　然らずんば　重て又の日四方責め來るべきなり　速に蒙古國人を調伏して　我國を安泰ならしめ給へ　彼を調伏せらるゝこと日蓮に非ずんば協ふ可らず

と云ふ　誰れか其の大膽に喫驚せざらんや　蓋し蒙國來寇の豫言は弘法の大骨子にして　日蓮の死活問題なり　彼れが蒙國來寇の豫言は　他の天災地殃の豫言の如く　又た亡國の豫言の如く　經文中無意義に之れを發したる歟　抑も又た大に見る處ありて然る歟　若し第一の如んば日蓮は唯一の平々凡々たる一賣僧に過ぎず　何となれば蒙國來寇の有無は法華經の眞價を左右するに足らざればなり　詩に云ふ　彼の雨雪を相る に先づ集るは維れ霰と　日蓮曾て泉涌寺に蘭溪に從ひ　其の箕箒の勞を取り　爲めに外情を知り　之れを弘法の大骨子として　蒙國來寇を豫言し　而して之れを包むに　仁王經藥師經を以てす　夫れ外情を知るに於て日蓮は即ち一知半解たり　其の門外漢たり　門外漢たる日蓮にして却つて專門家たる時賴時宗に向て警醒する處あらんとす　猶ほ小松帶刀後藤象次郎等が一知半解の偏見を以て　外情精通の德川慶喜を二條城に





說破せんと欲する如し　其の冷汗背を濡さず　却て釋迦に向て說法する處　是れ日蓮の日蓮たる特色なり　其の立正安國論を草し時賴に進むるや　漠然として蒙國來寇をほのめかし　其の事實として現れ來るや　其の未萌を知るの明を以て再び時宗を洗禮せんとす　余は日蓮の大膽にして胸中無數の權度に富めるに驚かずんばあらず　嗚呼是れ日蓮の能く覇を法界に成す所以にして　其の弘法の大方便たる　釋迦牟尼以來之れを活用せしもの　蓋し日蓮一人なり　之れを要するに　日蓮の蒙國來寇は元寇に於て殆んど無意義に屬し　何等の功德なし　何となれば　彼れが蒙國來寇の豫言は　弘法の大方便たるに過ぎざればなり

日蓮が蒙古襲來を奇貨とし　法華經を以て時宗を洗禮せんとするに急なるや　彼れが論は殆んど其の極端に奔れり　其の如何に死物狂ひに咆哮せしやを見るに足れり　曰く

相摸守殿等の用ゐざらんには　日本國の人用ゐまじ　用ゐずんば國必らず亡ふ可し　日蓮は幼若なれども法華經を弘むれば　釋迦佛の御使ぞかし　僅かの天照太神　又正八幡等むと申すは此國には重けれども梵天日月四天王に對すれば　小神ぞかし

と　僅かの天照大神　正八幡　何ぞ其の放言高議の極まるや　乃ち佛敎上認むる處の神を以て　我が皇祖皇宗たる天照大神正八幡と比較對照して之れを批議せんとす　日蓮が眼中大日本帝國なく　唯一つの法華經あるのみ　彼れは國家と歷史の關係　即ち國體の精華の在る處を無視せり

西行法師の伊勢太廟を拜するや　曰く

なに事のおはしますかは知らねども

忝なさになみだこぼるゝ

と　是れ我が精華の集注する淵源にして　一系萬世天壤と窮り無く　宇





內に冠絕する所以のもの　然るに日蓮　我が皇祖皇宗を以て　之れを梵釋日月四天に比し　敢て其の間に軒輊を試みんと欲す　是れ國華と歷史の關係を無視し　我が國體の精華を傷くるものにして　彼れが法華經を弘むるに急なる　竟に國家の元氣消長如何に關する一大事因緣をも忘却せんとするに至る　見るべし　彼れが敵國來襲の咆哮は　唯だ法華經弘通の方便にして　其の元寇に於て何等の功德なきことを　宜なる哉　時宗の省みる處とならざりしを　然れども以上の批難は　法界の偉人たる日蓮其の人に在ては蓋し痛痒を感せざるべし　何となれば弘法の要は大慈大悲の眼を以て　一切衆生を濟度するの手腕に在り　是れ釋迦出世の本懷にして　日蓮が其の行者を以て任じ　一天四海皆な妙法に歸せしめ　國家安全四海太平を期する處　其の精神氣魄　優に天地を動かすに足れり

傳へいふ　日蓮大難四十八　小難數知れずと　而して其の大難中の大難は　世に所謂ゆる龍の口の御難是れなり　彼れは宿屋左衛門の尉に依て上を侮り下を誑り　口を佛法に藉りて國事を私議するの罪に問はれ　斬に處す可く宣告せらる　而して彼れが將さに斷頭臺の露と化せんとする一刹那　彼れは時宗が深き情けの下に一命を繫げり　是れ實に文永八年九月十二日の事なり　同十一年五月二日　彼れは又時宗に依て　宗門弘通の免許狀を下附せらる　彼れは長廣舌を揮つて北條氏を痛罵せるに拘らず　時宗は能く彼れの死を救ひ　彼れに弘通の免許狀を下附するに至ては度量寛弘大政治家の手腕ありと謂ふ可し

日蓮既に宗門弘通の免許狀を得たり　而して彼れが弘法の大骨子として利用せし　蒙國來襲の豫言は　實に奇效を奏せり　當時彼れに悅服歸依し　隨喜の涙を流す多くのものゝ狀況を見るに





中略　豫言の如く　蒙古果して襲來せしかば　日蓮が勘文虛僞ならずと知るも知らぬも驚歎なし　改宗の者日に多かりし　云々

余が日蓮を目して　彼れは大膽にして胸中無數の權度に富めりと云ふは是れが爲めなり　彼れが衆生の弱點を衝く處　誰れか其の巧妙に驚かざらんや　是れ日蓮の能く覇を法界に成し　英名永く四海に傳ふる所以なり　抑も日蓮時宗を容れず　而して時宗能く日蓮を容る　嗚呼是れ時宗の時宗たる所以なる歟

物換り星移る六百載　北條氏今まいづくに在るや　彼れが滔天の罪惡は泰時　時頼　時宗の勳功に依て　僅かに其の業因を滅ぼし了はんぬ　さしも榮へし彼れが邸宅の趾は　徒らに野干影を潜むるの叢らと化して霏々の雨　颯々の松　只朧げに當時の面影をやどすのみ　而して之れが反抗兒たる日蓮の法燈は綿々として絶えず　到る處南無妙法蓮華經の聲

を聞かざるの地なし　司馬温公曰く、言は百世の師となり　行は天下の法となる　久々にして掩ふ可らず　是れを不壞の身と名づくと　余は此の言を以て　盡く日蓮に許す可らずと雖へども　兎にも角にも彼れの身は金剛不壞の身たり　男子生れて玆に到る　眞に無冠の帝王なり　彼れが執權の家に生れずして　穢多の子に生る　是れ孟軻氏の所謂ゆる　天斯の人に大任を下だすものにあらずして何ぞ

隱より顯なく　微より顯なし　彼れが穢多の子たるは　身延山頭に秘め置きし深密傳に依て明かなり　何となれば　該書は　彼れが腹心の法弟子富木五郎入道日常の筆に係ればなり　今其の略に曰く

時に善吉大志あり　故に獨り兵法を學び玉ふ　其の才又た衆に超へたり　然れども　事の應せざることを了知し玉ひて　是れより佛門に入て名譽を求めんと　遂に穢民の家を捨て　母の緣を尋ねて漁家の種族



と名乘り　八十六代四條の院　天福元年癸巳五月十二日　十二才にして同郡(長狹)清澄寺道喜坊の御弟子となり　云々

善吉は即ち日蓮の幼名なり　父は穢民團五郎　母は長狹郡東條村小湊の漁民蓮五郎の娘　名を於長と云ふ　彼れが曾て蓮長と云ひしは　妙法蓮華の蓮に據るにあらずして　外祖蓮五郎の蓮と母於長の長を冒したるなりと云ふ　蛇は一寸にして人を呑むの氣あり　彼れが倜儻不羈にして大志ありしは　深密傳の處々に散見する處にして　鄕黨の衆　日蓮の餘りに大志を抱くを嘲り

童や　汝敢へて天下を望むと申すや　をこがましと窘められ　彼れが燃ゆるが如き心血を轉じて佛門に入りし心事を顧みれば鐵石心腸の男兒も亦た一片同情の涙を灑がざるを得ず　聞く　ベコンス　フェールド侯は賤族の出に係ると　然れども人外なる穢多にはあら

ず　豐太閤水呑百姓の貧兒なるも　亦是雪駄直しにあらず　凡そ天下俊髦の子にして　不幸日蓮の如きものはあらじ　彼れが三界を出離して猶ほ其の門に入る能はず　幸ふじて母の緣に依り　漁民の子として纔かに出家得道せしを想へば　彼れが萬斛の血は　一時に沸騰して血管を迸しらんとす　彼れが渾然玉の如くなる能はずして　圭角稜々覇氣を帶ぶるは其の天性なりと云ふと雖へども　然れども其の境遇の悲慘之れをして然らしむるにあらざるは無し　彼れは憤りを以て身を起てり　故に彼れは身を終るまで之れを冷却せざりし　深密傳に曰く

諸宗無得道　法華一人成佛と公言し玉ひ　他宗他法折伏し玉ふことは前に輕蔑せられて御憤りあるに依てなり　只恨みなくして他を誹り玉ふにあらず　高祖の他宗を破折し玉ふ所以は御憤りある故也　此の本を知らざれば他を破するの意解し難し　是れ尊慮を知らざる也　故に憚らず恐れず他宗を誹謗すべし　是れ高祖の敵なるが故なり　吾門の輩永く之れを摸範とすべし

と　是れ彼れの消息を　忌憚なく暴露するものなり　ヂケンス曰く　偉人は不幸に在ても　牢獄に在ても　鎖りに繫がれても偉人なりと　日蓮大難四十八小難數知らず　佐渡の遠流に　松葉ヶ谷の燒き打ちに　龍の口の御難に　萬丈の紅炎を吐けり　彼れがインスピレーションは烈火の如し　如何なるものと雖へども　彼れに接觸して鎔解せられざるものなし　彼れが法燈の赫灼として今日に隆んなるは　法華經其のものゝ力より　寧ろ日蓮其の人の偉大なる感化力なりと云ふを憚らず　南無妙法蓮華經と云ふも可なり　南無阿彌陀佛と云も亦た可なり　彼れが勇往直進水火も避けず　能く壓制政府の下に立て　放言高論其の所信を貫徹する如きに至ては　實に今人の夢想するも及ざる困難にして　所謂ゆる膽毛

を生ずるものにあらざれば能はず　曰く法華一人成佛　他宗無得道と曷んぞ其の意氣の壯烈なるや　語に曰く　人の一發は天地も之れが爲めに反すと　古人吾れを欺かざるなり　余は特に彼れが龍の口御難に際し其の怪氣焔を吐けるを述べて　如何に彼れが其の自信の厚き偉丈夫なるかを示さんと欲す

我れ先年囚となりしとき　密かに法子を道隆の許に遣はし　官府の赦を申し乞ひ給はんことをねんごろに乞ふ　道隆いなまず諾す　既に其の日になりければ　吾れは馬に騎せられて街道を巡り　龍の口に趣くに途中に河あり(後ちこの處を呼んで行逢川と云ふ)　道隆この所に疾く來て吾れを待ち相逢ふ　馬の口を取て自ら相隨て　龍の口に至り　衆卒に云て曰く　夫れ禽獸たりとも　其の生を見ては其の死を見るに忍びず　其の聲を聞ては其の肉を喰ふに忍びず　今此の法子罪ありと雖へども未だ禽獸にはあらず　何ぞそれ死地に臨むを見て吾れ之れを捨てんや　愚僧が身にかへて此れを赦せよ　若し吾が言を用ゐずんば先づ吾れより先きに誅せよと云て坐す　劊士も如何ともすること能はず衆士集り議して遂に是れを公門に奏す　君公此の諫めを聞き赦狀を下だす　道隆遂に我れをともなひて歸寺す　經に曰く　若し人刀狀瓦石を加へんと欲せば　化人を使はして之れが爲めに衛護を作すべしと說き玉ひける　今此の變化の人とは則ち道隆なり　此の時若し我れを助けずんば　道隆も天魔となるべきに　吾れを助けんと思ふ心起りしに依りて　忽ちに佛の慈悲心道隆が身に入りしなり　嗟呼これ道隆が圖らず此の功德を得たるこそ　誠に聞法の幸慶なるものなれ(深密傳)

彼れが釋尊の再來を以て任ずるも亦た偉ならずや　若しそれ地を換へ執權の家に生れしめば　彼れは必ず時宗の爲す處を爲し　更らに進んで四

百餘州に發展し　震天撼地の覇業を爲すや亦た知る可らず　然れども唯是れ時宗の爲す處を爲すのみ　豐太閤の爲す處を爲すのみ　彼れに於ては即ち槿花一日の榮のみ　然るに日蓮執權の家に生れずして　穢多の子に生る　天の汝を震する何ぞそれ大なるや　身　穢多より起て百代の敎主となる　眞に平等無差別の大光明を發揮するものにあらずや　日蓮の日蓮として尊き所以のもの正さに玆に在り　何を苦んで穢多の子たるを耻ぢんや　夫れ釋迦は帝王の子たるか故に尊き歟　耶蘇は叩き大工の子たるが故に賤しき歟　佛眼を以て之れを觀れば　帝王も　叩き大工も亦た是れ一つの飯袋子に過ぎず　穢多の子たる日蓮に於て何んぞ痛まん

日蓮曰く　我れは旃陀羅の子なりと　旃陀羅とは屠兒又は殺者と譯すと今ま日蓮が旃陀羅の子なりとの宣言は　果して如何なる意味に於て之れを發したるか　余は之れを種々の方面に於て觀察せざるべからず





(一)　穢民團五郎の子なりと云ふに在るか

(二)　名門のなれの果て　當時の漁民貫名次郎重忠の子なりと云ふに在るか

(一)と云ひ　(二)と云ひ　孰れも屠兒又は殺者即ち旃陀羅に通ず　彼れを以て穢民團五郎の子と爲す可なり　又貫名次郎重忠の子と呼ぶも可なり

日蓮は這の旃陀羅を有耶無耶の間に呼號せり　獨逸の俚言に曰く　戀と咳嗽と　煙草と　金錢は　永く隱くす能はずと　日蓮が旃陀羅に於けるも亦た然らずや　彼れは赤裸々に我れは穢多の子と名乘り　而して一乘の妙法を天下に絶叫し　平等無差別の大眞理を發揮してこそ　日蓮の面目は一層其の光輝を放つにあらずや　日蓮が妙法を鼓吹する太鼓は　其の父團五郎が手づから製作したるにも拘らず　其の事蹟を曖昧模稜の間に葬り　却つて緣もなき貫名次郎重忠を父と仰ぎ　窃かに以て名門の後

裔にして　根からの賤民にあらざるをほのめかすが如きは　彼の演劇に安部の貞任が島にて死せし範氏を奇とし　其の名を冒して將さに大に爲す處あらんとするが如し　三界を出離したる日蓮にして　磊々落々たる日蓮にして　此の兒戲を爲すは何ぞや　彼れが蓮長と名乘りし天眞爛熳の美質より云へば　彼れが紋章は宜しく　井桁に蓮の花なるべきに　彼れは井伊家の一流貫名の　井桁に橘を用ゆる如き　一見實に笑ふに堪へたり　然れども其の小策略を弄する處　是れ即ち日蓮の三界を出離し大に悟る處ある所以なり　觀心抄に曰く　一念三千を識らざる者は　佛大慈悲を起こし　五字の内に此の珠をつゝみ　末代幼稚の頭に懸けしむと是れ日蓮が立敎の大眼目にして　親鸞は正を用ひ　日蓮は奇を用ふ　猶ほ機山の不識菴に於けるが如し　彼れ曰く　抑も人を敎導せんと欲するに　念佛宗の如く　只道理のみに偏るべからず　道理を辨ふるもの稀な





ればなり　凡そ奇を好み怪きに走ること　戲兒の傀儡師を追ふが如しと是れ日蓮の社會觀にして　多くは　貪　嗔　痴　三毒の化生なり　明治の今日にして　滔々たる社會の人類多くは皆な是れなり　況んや六百年前の昔　道理を知るものは實に落々晨星に過ぎず　當時其の嗜好に投ずるものは　只奇を好み怪に奔るに在り（日蓮の言を用ゆ）日蓮能く之れを觀破す　是れ彼れが一乘妙法の眞理を戴くに拘はらず　其の道理を後ちにして　方便を先きにする所以ならん　若し夫れ此の時に當り　彼れが妙法の眞理のみに殉して之れを說かんか　恰も釋迦が成道　直ちに華嚴の玄妙を說き玉ふと均しく　獨り大聲俚耳に通せざるのみならず　其の赤裸々に我れは穢多の子なりと絶叫せしめば　天下又た耳を傾くるものなきのみならず　彈冠して之れに觸るゝをだも厭ふ可し　由來我が邦人の門閥崇拜は第二の天性なり　其の門閥の影響が如何に事業を爲すに後援

を爲すやは　武門と云はず　佛門と云はず　歴々其の然るを立證せり

眞宗が殊に其の聲を大にして　天つ兒屋根の命大職冠鎌足の末葉を云爾する如き　殆んど佛門に於て緣も由緣りもなき俗緣が　却つて門徒の信仰を博し　不知不識の間に南無阿彌陀佛を謳歌せしむる如き　其のお有り難き意味には　門閥と南無阿彌陀佛と抱合して　一種の信感を生ずるものゝ如し　日蓮權謀術數に富むも　亦た此の軌道を脱する能はず　其の井桁に橘の紋章を打ち　彼れが父は天涯に落魄し漁民となれるも　猶是れ井伊家の一流　貴名なにがしのなれの果て　其の血統は決して平々凡々の土百姓にあらざるを示し　我れは旃陀羅の子也と暗に其の素性の賤しからざるを語る如き　妙言外に在り　亦た是れ眞宗が俗緣の尊きを誇ると同一筆法なり　一たび足を日蓮宗の山門に入れて　其の堂塔に其のてうちんに　其の裝飾品に眼を點せば　井桁に橘の紋章は見れば見





る程其の多きを加ふるの觀あり　而して識者の微笑して顧みざる處　是れ却つて世の多くの信仰を博する好材料となる　一見是れ奸雄　是れ賣僧　一隻眼を具し耿々たる日蓮が本來の面目を諒とするものにあらざれば其の意を領する能はず　日蓮が其の命の親とも賴みし腹心の法弟　富木五郎入道日常をして其の深密傳を書せしむるもの　安んぞ彼れが百年の後　其の本門の旨を明かにし　其の跡門を絶つの意にあらざるなきを知らんや　何となれば　彼れが赤裸々に穢多の子たるを明かし　平等無差別の眞理を示し　以て佛の知見に開示悟入せしめ　寧ろ跡門の跡を絶つも　本門の旨を明かにするは　日蓮が終局の素志なるを信ずればなり噫　七難即滅　七福即生の淺義を了し　日蓮に歸依するもの　若し夫れ日蓮が穢多の子たるを聞て呆然たらざるもの幾人かある

穢多の日蓮たるを聞て　所謂ゆる驚かず怖れず彼れを尊信するものは

天つ兒屋根の命の末裔親鸞なるを知つて南無阿彌陀佛を唱ふるものに比して　生死解脫の法門に近づく幸運兒なり　然るに　眞宗が藤原氏の後裔なりと云へば　此れは貫名の末葉なりと云ひ　彼れが見眞大師の勅諚を唱へば　此れは大菩薩の三字を拈じて日蓮をかつぎ揚げんとす　日蓮にして之れを聞かば將さに破顏微笑すべし　何となれば彼等は形骸を識て精神を識らざればなり　抑も法華經の極致は一念三千の妙心を得るに在り　所謂ゆる南宗禪なり　我が邦曾て男性にして之れを得るものを坂の上將軍とし　女性にして之れを得るものを和泉式部とす　日蓮の博學多才にして之れを唱へざるの理なし　而して日蓮が世に激し發憤するの極と其の一頭角を拔き一旗幟を建てんとするに急なるや　理を捨て　事を取り　一天四海盡く妙法に歸せんとの方便に出で　覇氣迸しる處終に三十番神なるものを排置し　其の極竟に「僅かの天照太神も　八幡太神





も　帝釋梵天王に比すれば　小神ぞかし」と放言し　我が國體の精華を無視し　國體の精華と佛的神髓の融和を阻隔し　建國以來の歷史を捨て之れを帝釋梵天王が法治の下に統括せんと欲す　是れ日蓮が角を揉めんとして牛を殺したるものにて　蓋し日蓮の本志にあらざるべしと雖へども　彼れが一言一行を金科玉條視するものは　更らに之れより甚きものあらん　借問す　梵天帝釋兵を將ひて攻め來る時如何　之れを擒にすと云はゞ吾れ日蓮を許さん　若し兜を脫て彼れが軍門に降らば　獨り天照太神正八幡の罪人たるのみならず　抑も亦た武士道の罪人なり　聞く日蓮の佐渡に謫せらるゝや　順德天皇の御陵に詣り　北條氏の跋扈を罵り　深く帝の蒙塵を慨き　王室の式微を憤れりと　世これを以て日蓮を勤王の法師と贊するものあり　然れども彼れは之れを以て　直ちに王室の忠臣なりと謂ふ可らず　日蓮の眼中唯だ法華經弘通にあり　北條

氏之れを妨ぐ　是れ彼れが法敵として北條氏を惡む所以なり　北條氏と雖へども之れを翼贊せば　彼れは喜んで之れを歡迎するものたるは　立正安國論其の他の敎書に於て掩ふ可らず　若し夫れ王室と雖へども之れを用ゐ玉はずんば　彼れが鋭鋒を向くる事北條氏の如くならん　之れを要するに　日蓮は法華經の信者なり　釋迦の御使と確信するものなり　上行菩薩の再來と信ずるものなり　日蓮の眼中日本帝國なく　唯だ法華經治下の國を認むるのみ

古人云ずや　文字を看る須らく猛將の兵を用ふる如くなるべし　直ちに是れ塵戰一陣せよ　酷吏の獄を治むる如く　直ちに是れ推勘底に到り決して他を恕せざれど　余が日蓮觀亦た此の意の外に出ずず





# 第五章　國家と武士道の消長

武裝せる平和――貧ば益貧富は益富――堂々たる國家の干城陸軍中將にして破廉恥罪に問はるゝ被告あり――唯酒勾の一死――獨是れ花は櫻木人は武士――名字帶刀の二――日本風俗史中に特筆すべき一大事因緣――壬申の詔勅――眞宗皇帝と魏野――リシエリウとアカデミー――源白石と穂積兄弟と坂谷――細川頼之と阿彌陀佛――大臣宰相と賤業婦――頼之と杜子美の詩集――刑律と黄金――富は未だ以て國家の性命とするに足らず――カンバランドの洗汐――對島水道と筑紫の二大戰勝を有する歴史的國民――アルフレット、マーシャル氏と經濟的武士道――法光寺殿果公大禪定門に參し來れ

今の世の平和は武裝せる平和にして　鬼も出れば　於福も出づ　輓近列强の特に海軍擴張に熱するの狀は　鼬子ッ子も啻のみならず　英國々論

の沸騰　露國及び伊太利海相の掛冠　近くば又獨逸首相の隱退　佛國內閣の更迭　一つに皆な其の因を海軍擴張問題の死活に發せざるはなし

如此くにして止まずんば　列强も亦た殆んど其の弊に堪へざらん　況んや我が新大勃興帝國に於てをや　夫れ國の至寶は未だ堅艦巨舶に在らず一つに元氣の消長如何に存ず　古往今來其の邦の奢侈に流れ滛逸に陷り志氣銷沈して革命の期を促がすもの　多くは戰勝の後ちに胚胎せざるはなし　是れ人情自然の理數にして　識者の夙に憂ふる處なり　我が國新らたに露國に勝ち　國民漸く驕るの色見ゆ　瘡痍未だ愈へずして　志氣沈み　惡稅未だ除かずして　奢侈長し　貧は益々貧　富は益々富にして富の大なるものは王侯に交通し　力ら吏執に過ぎ　利を以て相傾け　千里に游敖して冠蓋相望み　堅に乘じ　肥に策し　醇醴に醉ふて　肥鮮に飫く　大臣宰相又た顏色なく　世を擧げて黃金の下に靡かんとす



拜金の風一たび志氣を拂ふ時は　奢侈　滛逸　底止する處を知らず　堂々たる國家の干城陸軍中將にして　破廉耻罪の被告に問はれ　一國の選良國民の標準たる代議士にして　又た瀆職の罪に問はるゝもの躓を接するに至る　中にも横井某の如き　口にアーメンを唱へ　手に盜泉の水を掬する如きに至ては　殆んど沙汰の限り言語道斷の事に屬す　唯だ酒勾の一死　これぞ萬綠叢中一點の紅にして　弓矢八幡は未だ吾が武士道を捨させ玉はずとこそ覺ゆれ　現時國民の情態は　田沼時代に似て　更にそれより甚しきものあり　試みに日本風俗史を繙きて　田沼前後の有樣を觀るに

昔は町人も衣服帶刀などすべて武家を學び　商家の娘も武士の妻妾となるを規摸とせる習ひなりしに　今は武家の風を紫痴と誹り不粹と嘲りて柔弱艶妖の態を喜べば　武家却て町家の風を摸したり　此の期の

初め歌舞伎淨瑠璃三絃などを弄ぶに至りぬ　正德の頃　大坂より京都を經て義太夫節の淨瑠璃を江戸に傳へしより　貴賤ともに之れを好みあへりしに　享保の末　みやこ路豐後の掾といふ淨瑠璃太夫京都より來り凄惋なる聲にて男女の情愛を語り出せる程に　人々もてはやすこと限りなく　諸侯貴人もひたすら之れを喜びぬ　大名の夫人も裁縫の術は知らずして三絃を取て平素の慰みとし　待女にも躍兒三絃ひきを抱へて鄭聲を耳に絶たず　男子がこれを聽くばかりなるはまだしも後ちには自らもかき鳴らし喉を絞り顏をくづして謳ふものあり　太夫の號を得てこれを誇るも多し　況して町家にては　女兒は固より男子までも小唄を歌ひ　三絃を彈き　月待日待などいひて淨瑠璃の會を催ふすこと　京大坂はいふに及ばず　普く江戸の習となりぬ　されば江戸初世の質朴武勇の風は何時しか失せて　豐後節一流の弊世に擴まり





淨瑠璃太夫の風を摸して　頭髮衣服なども文金風とて柔弱至極なる態を出し　その他諸事に俳優娼妓の俗を傚ふこと甚だ多し　世態既に斯の如くなれば　町家はもとより武士も華奢風流を競ひ　刀劍も外面の裝飾を專らとして鋒刃の利鈍を問はず　日々遊里に徘徊して其の事情に通じたるを通家といひ粹人といふ　天明の頃十八大通あり其の中藏前札差文通といへるは銀線を以て髮を結べりと云ふ　云々

三河武士が櫛風沐雨に鍛へ上げたる勇敢の氣骨は　一轉してしらつか組町奴の氣象となり　再轉して鮫鞘の落し差となり　三轉して十八大通となり　江戸の風俗敗壞して斯の如し　宜なる哉　八萬の人中男兒なく慶應明治の際一敗地に塗るもの偶然にあらず　而して今日の奢侈淫逸は更に之れより甚しきものあり　是れ天下の樂みに後れて樂む士の默視するに忍びざる所ならん　余は百尺竿頭一歩を進め　更に當時黃金其のも

の丶魔力の如何なりしやを窺はんとす欲す　曰く

祖先の名を重んじ財を輕んぜし風は那邊にか去りけん　今は金錢を以て身命にも替ふべき寶とす　されば筋もなき町人が旗本家人の株を買ひ立身するもあり　婚姻にも支度金を第一とすれば　窮乏のものは緣なきが多し　人情斯の如くになりては如何ぞまた廉節淳朴の風を見んや

儒學醫道を以て世を渡るものも　書を棄て匕を捨て幇間の業をなし書畫の達人俳諧の宗匠といふも　多くは阿諛諂佞以て富人の懷中を窺ふものなり

讀んで茲に到る　黃金の人を魅する洪水猛獸の害よりも甚だし　然れども當時黃金の魔力は未だ社會の中心に潛み　一道の暗流たるに止まり猶ほ是れ花は櫻木　人は武士の世にして　角倉鴻の池の富と雖へども黃金の潛勢力を以て社會の表面に誇り得可きものは　唯だ名字と帶刀御





免の二つにして　而かも其の資格は一つの用達に過ぎず　今日の黃金力は乃ち然らず　勳爵も之れに遇へば忽ち其の貴きを失ひ　官位も之れに觸るれば忽ち其の威を失ひ　智者智を失ひ　辨者辨を失ひ　學者も亦た其の德を失はんとす　是れ建國以來未だ曾て見ざるの現象にして　後世史家の日本風俗史中に特筆すべき一大事因緣ならずや

宸襟茲に安からず　煥發して壬申の詔勅となる　是れ何物の罪ぞ　拜讀して

惟レ信惟レ義　醇厚俗ヲ成シ　華ヲ去リ實ニ就キ　荒怠相誡メ　自彊息マザルベシ

に至る毎に　悚然として襟を正し　慨然として泣かずんばあらず　曩きに遼東半島還付の詔勅を拜して泣き　今ま大平の世　復た此の詔勅に對して泣かざるを得ざるもの　吾が臣民の不忠豈に之れに過ぐるものあら

んや　長大息に堪へざるもの多し　讀賣子

而して翻つて現時の情態を觀れば

之れを論じて曰く

初冬紅葉の節を利して　近日紳士縉商の燕飲園遊の會を開きて　士君子を招待するもの少からず　我儕之に臨むごとに一種異樣の感想を懷きて歸るを常とす　斯る席上の常として　數百の會衆一所に會する能はざるを以て　三々五々彼處此處に分れ　一個の小中心を圍みて團體を作るの習あり　然るに此小團體の中心たるものは　現任の總理大臣か　然らずんば伊藤侯に止まり　其の他は黃金の威力を有する紳士富豪にして　彼等が衆客に圍繞せられて談論流水の如く諧謔止る處を知らず　得々然たるに方りて　前任現任の大臣等は悄然として一隅に佇立し　破荷落葉に注目するも少からず　若しそれ大臣以外の高官　民





官の識者　一代の學者に至りては　會衆其の存在を認めざるものゝ如く　白眼に過ぐるを常とす　我儕數ば喟然として嘆して曰く　是れ官尊民卑の弊を矯めんとして　過つて民尊官卑の弊を作るものにして國家の權力も　學問の權威も　天才の尊貴も　皆な黃金の前に輕からしめんとすと　流漸今にして防がずんば　恐らくは風會とならん

明治維新の改革は　木强なる武人の手によりて爲されしがため　鄕曲武斷の風靡然として風を爲し　小吏屬官も威福を弄する地あるを以て百萬の黃金を積む者も　往々にして甘んじて小吏の侮辱を受けざる能はざるものあり　數百町歩の大地主にして　一縣の警部たるを榮譽として得々たりしものなきにあらず　遂に天下をして囂々として官尊民卑の流弊を叫號するに至らしむ　然るに議會の開設や　新聞紙の進步によりて　官尊民卑の流弊漸く救はれんとするや　端なくも民尊官卑

の流弊を生じ　富豪の權國家に代り　黄金の勢力文武の勢力に代り
一世の才人附炎隨熱して相煽揚して　更らに之を制抑するものなきが
ため　其の流弊官尊民卑より甚しからんとす　蓋し木强の武人專權と
雖も　尙ほ學問を尊仰し天才を敬重するを解したりき　然るに今の紳
商なるものに至りては　學問も　天才も　購買し得べき商品なりと信
じて　黄金と刑律の外　亦た寅畏敬重すべきものなしとす　彼等は思
らく　才識の士か　彼は我會社の書記たり　學問の人か　彼は我女婿
たり　新聞記者か　彼は我驅蛇金に屈伏せり　政府の顯官か　彼は他
日の地を爲さんが爲め我歡心を求む　凡そ此世に於て　戀も　名聲も
權力も　法律も　我が手中に在り　我何ぞ彼の孤影悄然たる　學者
識者　天才を尊まんと　即ち一知半解の智識によりて　天下國家の政
事を評論し　文學技藝を品騭して辭せず　見るべし　民尊官卑の社會



は官尊民卑の社會に比して一層俗惡にして專權なるを　是れ豈に角を
矯めて牛を殺すものにあらずや
昔し唐の魏野か樂天洞に在るや　天子眞宗　其の像を祭り　人を遣は
して招致せんとす　然れども彼れ遂に其網羅に入らず　是れ所謂ゆる
王侯に仕へず其事を高尙にするものにして　天子之を强いざるもの
天子もまた臣とせざるの人あるを示めすものにして　君臣兩樣の風懷
甚だ慕ふべしとなす　若し夫れ普魯亞勃興の基を立てしフレドリック
大王が　學士を延きて敬重したる如き　佛國のリシエリウが命世の才
震主の威を以て　アカデミーを建てゝ學者を集め　學問の權威をして
貴族の權威と相並ばしめたるが如き　武權　黄金　勢力の外　尙ほ尊仰
すべきものを示すものにして　其落々の胸懷　公明の心事　益す尊敬
するに足る　今や即ち俗惡なる一代富限は　天子の臣とせざる處のも

のを臣妾とし　英雄の士が世襲貴族の權威と並行せしめんとしたるものをも蹂躙せずばん己まざらんとす　流岩浮競　黃金を崇ぶの風一つに此に至る　誰か我國を以て崇文奉學の美風ありと爲すものぞ　我儕不幸にして之を信ずる能はざる也

と　亦た是れ一服の清涼劑　謂つ可し稍人意を强ふするものと　今にして其の流漸を防がずんば　滔天の勢ひは世を擧げて其の渦中に葬り去らんとす　余以爲らく　列强の均衡は深く恐るに足らず　其の恐る可きは黃金に在り　若し夫れ日本を亡すものありと云はゞ　开は黃金の魔力ならん　余は羅馬希臘の衰亡を觀るに　其の奢侈淫逸に流れて志氣を喪ふもの　其の因黃金の魔力にあらざるはなし　黃金の人を魅し國を蠹す恰もペストの如し　昔者河村瑞軒一代富限の勢力を以て　源白石を其の書生中に鑒識し　其の資を割て白石に致たし　女を以て之れに娶はさんとす　白石當時擔石を支ふるの資なし　然れども白石儼然形を端して之れを擯く　世其の識見の高きを賞す　今や穗積兄弟の如き　坂谷芳郎の如き　一代學者の木鐸を以て　澁澤淺野の女婿となる　彼等天日に對し炊しき處なきも　豈又た龍身を害ふ針なるなからんや　後進の學士　彼等に傲ふて富豪の女婿を甘んずるもの　往々にしてなきにあらず　天下最高の學府に養ふ俊髦にして　喜んで富豪の門に奔り　唯だ其の用ゐられざらんことを恐る　如此くにして熄まずんば　士氣地を掃ふて亡びん彼の山川博士の如き硬直の士を見るは　吾人の竊かに喜ぶ處なり　而して博士をして玆に到らしむるもの　獨り之れを父兄の遺傳に得るのみならず　遠く之れを會津仁公が三百年來の遺德に稟く　偶然にあらざるなり　大觀達識福澤翁の如き　敢て義を後にし利を先にするに拘はらず猶ほ武士的氣質を以て國の性命と爲し　之れを保存するに努めり　然れ

ども彼れが角を矯めんとして利を勸むるの勢ひは　恰も虎に騎る如く
中ごろにして下る能はず　疾走の極　竟に今日の形勢を馴致し　竟に目
的の牛を殺し　曾て其の育英したる處の人材　多くは黄金の魔力を揮ひ
志氣を魅するの材となる　今ま翁逝て長夜臺に眠れり　若し夫れ斯の人
を起こし閻浮提の事を見せしめば　將た之れを何と云はん　士氣の一消
一長豈に徒然にして成るものならんや
余は古今の史乘に徴し　先づ細川頼之を擧げて今時の大賢に望まざるを
得ず　彼れは殺伐の世僞朝の時に立てる足利氏の柱石にあらずや　彼れ
は逆境の朝に立てるにも拘はらず　其の識見遠く古今を絶し　終に南北
朝を統一し　神器を萬世に傳ふ　其の功績敢て時宗に減せず　請ふ少し
く彼れが性行を語るを得て　以て諸賢が頂門の針と爲す可ならん乎
頼之　貞治六年を以て　足利義詮の召に應じて京師に入り　其の遺命





を受けて幼主義滿を輔佐し　政兵の權悉く其の一身に集る　内は幼主
を敎導誘掖し　外は老臣宿將を鎭壓愛撫し　賢良を進め　姦邪を遠ざ
け　財力を養ひ　風俗を正せり　特に幼主の師友其の人を擇ぶことに
心を用ひ　戒法五章を出して其心術を格さしむ　又制法三條を一般に
布告して　大に士風を張りしが　姦邪猶ほ未だ息まざるを以て　乃ち
以爲らく　疑を以て疑を脱するは禪侶の智なり　橛を以て橛を拔くは
工匠の才なり　惡を以て惡を除くの計なかるべからずと　遂に法師の
如き者六人をして　異服異巾を着け　大小二刀を帶び　營中を徘徊し
て義滿及び諸將と游狎せしむ　此の輩競ふて諛言を爲し　媚態を呈し
頗る俳優者に類す　之れを名づけて侫坊と云ひ　又奸坊と云ひ　後ち
其の童子を扮裝するを以て名づけて童坊と云ふ　而して其の名を隨阿
彌陀佛　本阿彌陀佛　照阿彌陀佛　波利阿彌陀佛　高阿彌陀佛　觀阿

彌陀佛と稱す　諸將士の中其の擧動の亦た法師に類する者あれば　指して士童坊として之れを嗤笑す　故を以て將士等其の名を受けんことを恐れて自省するもの多く　茲に於て諂諛の風大に改まる　又專ら勤儉を尙び政を執るを以て　數年ならずして在京諸侯の游宴盡く止み奢侈の風大に改まり　娼優の輩殆んど其の業を失ふに至れりと云ふ

讀んで茲に到る　伊藤公等以て如何と爲す　今や大臣宰相賤業婦と車を同ふし　白晝大道を疾驅して愧ちず　而して彼の阿彌陀佛の輩　阿諛諂佞以て意を迎へ　大國の貴賓を招き　海陸の軍人を慰むるも　亦た此の阿嬌にあらざれば　以て其の歡心を得る能はざるものと爲し　淫逸の極爛て以て俗を爲し恬として怪まず　却つて外賓より「娘の國」の贊辭を得て心竊かに通を誇り外交の能事了れりと爲す阿彌陀佛なきにあらず　賴之の風を聞て彼等も亦た曷ぞ少しく顧みざる　賴之の讒に遇ふて海南に趣





くや　唯だ杜子美の詩集一筐を携へ　飄然として京師を去れり　彼れか襟懷の高潔なる亦以て想見するに堪へたり　彼れ曰く　吾れ先代に從ひ國師の佛法を劇談するを聽き　頗ぶる眞珠に達す　遂に能く死生一の如し　事に臨んで懾れず　而して先人竟に忠に死す　吾れ亦た身を委ね以て君に事ふるを知るものは皆な國師化導の力なりと　國師は即ち夢想國師なり　亦た以て彼れの素養を視る可し　元策禪師彼れを讃して曰く　平素蔬食淡飯　終日超々然として　塵を拂ひ玄を談す　斐休龐蘊(宋朝の宰相)の風ありと　賴之の風を聞くもの　亦た曷ぞ少しく彼れに私淑せざる　夫れ松蔭長門に唱へて俊才輩出し　南洲薩南に起て英豪競ひ出づ況んや天下の重望を負ふ賴之其の人の感化力に於てをや　而して今の世賴之其の人なく　又松蔭なく　又南洲なし　いづれもどんぐりの丈け競べ　輕佻浮薄　世を擧げて黃金の魔力に壓服し去られんとす　歎するに

堪ゆ可けんや

今の世　世道人心をして正に歸せしむるの急は　唯だ禪風を宣揚し武士道を砥礪するに在り　人　一旦心要を錬り　榮辱の巷を離れ　死生の外に立つを得ば　氣宇自ら高く　廉耻求めずして到り　拜金の風地を掃ふて落ちん　若し夫れ然らず　徒らに科學の末を窮め　心要を後にせば智益々進んで　德愈々退き　放僻邪侈到らざる處なく　竟に刑律と黄金の外　亦た世に尊ぶべきものなきに至らん　見來れば只だ是れ一包の膿血　小野の小町も業平も　亦た幾大塊の骨頭をつゝむもの　饑て能く食ひ　渴して能く飲み　能く衣服を着け　能く淫欲を行ひ　貧賤にして富貴をうらやみ　富貴にして權勢を貪り　忿つて而して爭ひ　憂へて而して悲しみ　窮して而して濫し　樂んで而して淫す　得れば則ち欣々　喪へば則ち戚々　凡百の所爲一つに氣血に信かせ　老死して而して已むも





の　滔々たる天下多くは皆な此徒のみ　而して我が國が一躍直ちに一等國の優勢を得たるもの　纔かに武士道の中流人士に存ずるに因れり　武士道の國家の汚隆泰否に關する　豈に偉且大ならずや　夫れ一國の一消一長は　國民の奉公的精神（パブリックスピリット）の富むと否らざるとに由らざるはなし　而して奉公的精神の粹は　武士道を措て他に比すべきものなし　而して今や武士道の性命　七百年來の惰力に依て　纔かに一部人士の間に餘喘を保たんとす　是れ識者の大艦巨舶の成ると同時に國家の前途を憂ふる處なり

或人曰く　子の我が國を視る甚だ悲觀に失す　子我が國の富强を視ずや富既に百三拾五億の多きに達す　是れ人心振ふの兆にあらずやと　嗚呼是れ世の紳士縉商と目する徒の常に口を之れに藉る處の常套語にあらずや　然れども之れを米の一千二百五拾一億　英の一千零五拾四億に比す

れば　實に拾分の一に過ぎず　佛は八百六拾八億に至り　獨は七百三拾二億に達す　若し夫れ富を以て國家を其の間に軒輊せんと欲せば　之れを支那以下二等國の班に列するも　亦將さに誇稱する處なからんとす然らば則ち　富は未だ以て國家の性命とするに足らず　往昔イギリスのアルマダに抗し　オランダのイスパニアに敵し　北米合衆國のイギリスに反す　皆な貧弱の地位を以て富强に當り　能く其の壓迫を制す　視る可し　國の至寶は未だ富にあらずして國民の健全なる精神に在ることを　ウヰルソン曾てカンバランドの沈沒を論じて曰く　世に國民の生命に必要なる勇敢なる實例の遺產あり　戰死と敗北と雖へども偉大なる精神に伴へば　國民の精神を向上せしむ　カンバランド艦上の將卒の戰死は惜むべきも　國家の歷史には頗ぶる有功也」と　是に於てか知る　戰死と敗北と雖へども猶ほ偉大の精神に伴へば　國民の精神をして向上せしむ





況んや我が對島水道と筑紫の二大戰勝を有する歷史的國民に於ける精神上の感化に於てをや　且夫れ富の膨脹は奢侈を生じ　奢移は淫逸を生じ淫逸は人心を蝕蝕す　羅馬希臘の衰亡炳として眼前に在り　是れに因て之れを觀れば則ち　國家の元氣精神を養ふは本なり　富を計るは末なり而して國民の元氣精神を養ふの道　武士道に過ぐるものなし　余は武士道に伴はざる富の發達は寧ろ其の害を視るも其の利を視ざるなり　ケンブリッチ大學教授アルフレット、マーシャル氏は　經濟的武士道(シヴアルリー)に論じて曰く　富は人類の發達に必要なる目的に費消せらるべきものにして　社會を害して得たる富は　理財學上最も擯斥すべきものにて　中世紀の悲慘なる戰鬪時代に武士道興りたる如く　今日の悲慘なる實業戰爭場裏にも　商業上の武士道興らざるべからずと　見るべし　富は方便にして其の目的にあらざるを　余故に曰く　今の世世道人心をして正に

歸せしむるの要は　禪風を宣揚し武士道を砥礪するに在りと

夫れ武士道の消長は　國の汚隆泰否に關す　苟も世を憂ひ時を慨くもの

噫亦た盍ぞ其の本に反へらざる　我が國武を以て國を建つ　武は戈を止

むるなり　嗚呼這の一字子　即ち世界平和の司命を制する覇柄にして

只我が大和民族の手中に在り　別人をして手を下さしむることを得ざれ

嗚呼此の大自覺大自信を透得せんと要せば　須らく法光寺殿果公大禪定

門に參し來れ





# 第六章　時宗何人ぞ

人間至極の大寶—事情と周圍の奴隷—不朽の生命—岩崎久彌と貧乏ごつこ—學校圖書館其の他のあらゆる慈善事業—口な家憲に借りて一錢なき商む—金錢は偉大なる品性に伴はざれば何等の價値なもの有せず—一のエマーソンと百のカーネギー—ブラッキー氏の品性論と紳士繕商—ロスチャイルドと臨終の奇言—維摩居士と身の無常—死と足利直冬の詩—生兵法大疵のもと—千百の公案と一句の警語—達磨の不識と上杉謙信—永嘉大師と遺懷—臺山國師と座禪の用心—越すに越されぬ大井川—非思量底の前には智慧も學問も入らない—鬼面人を嚇すの材料—釋迦と明星—太田道灌と大身の鎗—後醍醐天皇と大燈國師—資朝俊基儘かに維新の三條岩倉—大石良雄と硯の機絲—小原鐵心と

月落の一句——非思量底の好音信——美人名將老病の狀——現實社會を代表する見本の人——唯だ大慈大悲の心

古德曰く　舜何人ぞ吾れ何人ぞ　爲すあるもの亦た如此しと　余も亦云はんと欲す　時宗何人ぞ吾れ何人ぞ　爲すあるもの亦た如此しと　況んや彼れが膽は　固と豆の如く小なるものにあらずや　時宗云はずや　吾れ祖元大德の鉗槌に因り　人間至極の大寶を得たり　又天下の大と雖へども恐るゝに足るものなしと　嗚呼人間至極の大寶とは何ぞ　是れ獨り時宗の獨占すべきものにあらずして　横眉竪目の人　本來之れを具有して自ら知らざるのみ

皆な人のもとの心はますかゞみ
磨かばなどか曇りはつべき

然るに世人の多くが　醉生夢死して　人間至極の大寶を得ざるものは





只だ惑る物に蔽はるゝが故のみ　余は此問題を解決するに先だち　眼を轉じて　先づ吾人が目前にちらつくものを視んと欲す

利のほしき爲め　名のほしき爲め　よき男と思はれんが爲め　事情と周圍の奴隷たらざるもの　方今天下　幾許の人を算し得ん　多くは如何に外面を飾るとも　良心の法廷に立ちては　一つの可憐なる失敗者　僞君子と宣告せるゝの徒にして　彼等が成功の月桂冠として世にてらふものは　一つの黃金の光りに過ぎず　是れ利に渴し　名に渴し　よき男とならんと熱望する　輕薄才子の垂涎措かざる處にして　世に怪しげなる富豪の　嘖々として實業雜誌に唱道せらるゝ所以なり　嗚呼成功　成功成功とは果して如何なる意味か

マーデン氏之れを論じて曰く　光榮を誇るべき成功は　たゞ獨り不朽の生命あるものゝみ　品性の發達を度外視せる成功は　未だ以て成功の名

を冠するを得ず　若し一つの行爲にして　何等の向上的前進的傾向を有せずとせば　換言すれば　若し人にして泥中に匍匐するならば　彼れ如何に巨萬の財産を有するも尙ほ失敗と謂ふべし　成功も　熱望あり向上あり　併せて他人を鼓吹するものにあらざれば　眞の成功と謂ふ可らざるなりと　視る可し　成功は　不朽の生命にあつて　巨萬の富みにあらざるを　氏は更らに痛快なる語調を以て　一歩を進めて曰く　人生　吾人の適く處　前に高尙なる品性の探海燈を照らし　後ろに一道の光明と幸福とを殘し　吾人の足跡の及ぶ處に　花を散らして歡迎せらるゝは　刻薄無情　俗惡野卑なる　金錢を積むよりも　遙に大なる成功なりと米國は最も物質に重きを置く國柄なるに拘はらず　マーデン氏が成功の意義如此し　吾儕君子國を以て　自ら許るす國人にして　所謂ゆる成功の中　刻薄　無情　俗惡　野卑の金錢を去りては　成功と云ふ可らずと





云ふに至ては　吾人は成功を口にするも忸怩たらざるを得ず

近時　岩崎久彌が一二の富豪と貧乏ごつこを爲したる事は　新聞紙の嘖々と稱道する處にして　彼等が美と眞とを感得する能はずして　斯る野卑の趣向を以て能事了れりとするの狀を見れば　余は天下第一の富限の爲め　一掬の涙を灑がざるを得ず　彼等が高尙の趣味を解せずして　心事の貧しきこと如此し　況んや　他の碌々たる拜金者にして彼等よりも又數等を下だるものをや　マーデン氏は此等の者の性情を寫して曰く

野性其の勢ひを得ば　美しき性情は泯滅す可し　理想之れが爲めに低下し　人生之れが爲めに趣味なく　天禀の美性之れが爲めに破碎せらる

拜金主義の實業界は　美と眞とを感得することなし　彼れが天性の野卑なる方面は　方外に發達し　禽獸的慾望は限りなく生長して　其の善美なる方面は屏息したるなりと　恰も法廷に立て　檢事の論告を聽くの感

あり　彼等がごしにも耻ぢず　二八の阿嬌を養ひ　身先づ家廷を蹂躙し
て　子孫に餘殃をのこし　而して　却つて子孫に向つて己が得手勝手に
制したる家訓を遵奉せしめんとするも　亦た可笑からずや　マーデン氏
は更らに一歩を進め　彼等を追窮して曰く　借問す　成功の戰場に出で
ゝ　品性を犧牲にしたる人幾何ぞや　友を賣り義理も人情も振り捨てゝ
利に走りしことなからざりしや　高尚なる天性を犧牲にして　不義の富
貴に耽りしことなからざりしや　換言すれば　彼れは浮雲の如き貨殖に
汲々たる餘り　善良なる天性の半面を失ひしにあらざることなかりしや
彼の銀行預金帳や　金庫は　音樂　詩歌　美術　將た天然の風光よりも
遙に大なる快樂を彼れに與ふるなりと　然り彼等の慾望は唯だ金錢のみ
彼の千葉勝が毎日紙幣を數ふるを以て　無上の樂みとせし如き　是れそ
の最も甚しきものなり　然れども　彼等が金錢の充實すると同時に　名





譽を得んとするは　自然の情なり　是れを以て　彼等は種々の方面に義
捐を爲せり　マーデン氏は之れを論じて曰く　學校　圖書館　病院　其
の他あらゆる慈善事業に投せらるゝ　幾百萬圓の黄白は　其の賃銀を鋏
み去りつゝ　勞働者より盗み取りたるものなり　固より　被傭者は其の
俸給にて働くことを承諾せるものなれば　法律違反とは謂ふべからざる
は論なしと雖へども　雇主の道德的義務を完ふするものとは謂ふを得ざ
るなりと　然り　彼等が一片道德的情義なく　其の冷酷なること寒中の
鐵の如し　骨肉の親　故舊の誼も　口を家憲に藉りて　一錢を借すを啬
む　苟も利の爲め　名の爲めにあらざれば　舌を出すも亦た之れを惜む
曾て志を語りし　同窓の朋も　竹馬の友も　知て而して知らざる如し
人若し其の友の名を語れば　曰く　そんな人も有りしよふに覺ゆと　彼
等が其の情を矯め義を忘る如此し　マーデン氏之れを責めて曰く　彼れ

の氣質は既に一變したり　彼れは又昔日の彼れにあらず　彼れが竹馬の友は　最早や彼れを見るに同窓を以てせざるなり　彼れは冷淡なり　傲慢なり　不倫なり　無情なり　彼れは自ら力めて斯の如き人たらんと欲するにあらず　唯だ拜金主義の罪なり　彼れ若し青年時代に於て　拜金家の爲す處を見ば　必ずや慄然として膚に粟を生せしなる可し　唯彼れは　無情　冷酷　卑俗なる境遇に身を處し　幼時の美風を失ひ　知らず識らず其の弊竇に陷りしなりと　讀んで茲に到れば　殆んど憫然の情に堪へず　嗚呼彼れも亦た人なり　拜金主義の捕捉する處となりて　其の天禀の美を失ふ　若し彼れより　無情　冷酷　俗惡　野卑なる金錢を剝ぎ取り來れば　彼れも亦た義を知り禮を重んずる　好箇の眞人間なり　語に曰く　小人罪なし　珠を抱て罪あり　是れ彼れの罪にあらず　其の無情　冷酷　俗惡　野卑なるは　畢竟金錢の罪なり　嗚呼金錢　金錢





汝ぢは何程の効能を有するや　マーデン氏之れを論じて曰く　金錢は成功を計る力を有せず　又た金錢は偉大なる品位に伴はざれば　何等の價値をも有せざるなりと　然り　金錢は　世人の思ふ如く左程効能あるものにあらず　人　金錢あるが爲め　無情となり　俗惡となり　冷酷となり果ては　身を壞ぶり　命を失ふものあるに至るは　金錢あるが爲めにして　之れを仕活して利用するものは　天下其の人甚だ鮮し　故に「財は災なり」といふの警語は　吾人の眷々服膺して忘るべからざる訓戒なり　此れに因て之れを觀れば則ち　金錢は末なり　品性は本なり　然るに世人の多くは　金錢を得るに是れ日も足らずして　却つて品性を閑却して顧みざるは何ぞや　是れ唯だ現時の物質的現象に醉えるの罪なり　夫れ物質的崇拜の米國にして　猶ほ　一のエマーソン即ちコンコルドの哲人あるは　百のカーネギーを得るに勝さると誇るにあらずや　嗚呼汝ぢ　利

に醉ひ　名に醉ひ　聲色車馬に醉へるもの　早く昏迷不醒の現境を脱して覺醒する處あらずんば　我が帝國を何れの地に置かんとするや　是れ其の壬申の聖勅を忝ふるする所以ならずや

夫れ國の文野は　品性の高卑に在て　必ずしも金錢の多少に因らず　之れを天下の大に視るも　之れを個人の立脚地に徴するも　品性を後にして金錢を先するものは　必らず亡ぶ　羅馬と云はず　希臘と云はず　古今の歴史は　國に　人に　其の失敗を繰り返へし　繰り返ひしつゝ語るにあらずや　ブラッキー氏曰く　人生の航路に當りて　難船の不幸を免れんと欲せば　先づ一物至要の理を知らざるべからず　金錢は至要にあらず　權力も至要にあらず　才能も至要にあらず　自由も至要にあらず　健康も亦た至要なる唯一のものにあらず　獨りかの品性　即ち完全に修養せられたる意思こそ　實に吾人を狂瀾怒濤の中に濟ふべきものなれど





豈に唯だ獨り個人として　吾人を狂瀾怒濤の中に濟ふのみならん　天下國家の浮沈も　亦た斯の品性の如何に關す　何となれば　個人の品性は國家の品性　國家の品性は天下の品性なればなり　羅馬希臘の衰亡は品性の墮落に因り　支那の振はざるも亦た品性を顧みずして只管ら阿堵物に殉するに因れり　是れに因て之れを觀れば　金錢深く尊ぶに足らず權力も亦深く恃むに足らず　自由も亦深く愛するに足らず　健康も亦た唯一の立脚地として誇るに足らず　唯夫れ守り本尊として尊むべきもの獨り品性なる哉　彼の文臣錢を愛しみ　武臣命を愛しむに至るは　畢竟品性の低落して金錢に醉えるの罪なり　余はブラッキー氏の此の語を書して　今の所謂ゆる紳士縉商が　學問も　天才も　人格も　權力も　皆な金で買ひ得る商品なりと速了するものに送り　之れを神棚に捧げて朝夕讀誦せしめんと欲す

人格と黄金　黄金も人格の高きに逢ふては　其の燦然たる光色を失はんとす　マーデン氏之れを論じて曰く　怪しき手段に依りて　巨萬を致したる所謂ゆる富豪も　嚢中無一物にして偉大なる個性を有せる人の前に出でゝは　自ら慴伏せらるゝの狀　實に笑止千萬なりと　是れ吾人が實際に目擊耳食する處にして　平沼專藏の森田悟由禪師に於ける　大槻内藏の助の織田大炊に於ける　躓を重ね聲を飲んで　其の人格の高きに打たるゝの狀　其の實際なると演劇なるとに關せず　吾人をして轉た崇敬を拂ふの念を禁ぜざらしむ　夫れ黄金を積んで北斗を支ふるも　以て品性を買ふを得ず　是れ永嘉大師の所謂ゆる　無價の珍なるものなり　大師曰く　無價の珍は用ふれども盡くることなし　物を利し緣に應じて終に惓まずと　是れを俗惡無情冷酷にして　用ふれば忽ち盡きて影をも留めざる金錢と　豈に同日にして論ずべきものならんや





余曾て　世界富豪の傳記を讀み　其の富豪中の富豪ロスチャイルドが死に瀕する言を見るに　彼れ曰く　神は將さに吾が命を奪はんと欲す　嗚呼神よ　神よ　早く吾れに金を與へと　絶叫して瞑せりと　詩に云ふ

鳥の將さに死せんとする　其の鳴くやかなし　人の將さに死せんとする　其の言ふやよしと　是れ臨終の言は　至誠に出で　其の本然の美に歸るを以て　法廷の證言にも之れを採用するにあらずや　然るにロスチャイルドが　一息截斷のだんまつまに臨み　猶ほ金錢に執着すること宇津の谷峠の文彌をして　三舍を避けしむるものあり　彼等が目前の利を見るに明かにして　其理を悟るに盲き　畢竟物質の外　世に存在するものを認めざればなり　彼れは身よりも金を愛せり　然れども　彼れは其の實身あるが爲めに金を愛せり　故に彼れは　其の身の終らざるに先だち之れを得んとするの情切なるや「早く　吾れに金を與へよ」と絶叫して瞑せ

り　此れに因て之れを觀れば則ち　如何に金錢に憧るゝものと雖へども
其の實　身は金錢より可愛きものとこそ見えたれ　而して彼れが死守し
て愛する處の其の身は如何　維摩居士曰く　この身は無常なり　力なく
堅きことなし　速かに朽るの法なり　信ずべからず　苦みたり　惱みた
り　衆病の集る處なり　此の如き身は　明智の者の恬まざる處なり　こ
の身は聚沫の如し　撮摩すべからず　この身は泡の如し　久しく立つこ
とを得ず　是の身はほのほの如し　渴愛より生ず　この身は芭蕉の如し
中に堅きものあることなし　是の身はまぼろしの如し　顚倒より起る
この身は夢の如し　虛妄の見たり　是の身は影の如し　業緣より現す
この身は響きの如しもろ〳〵の因緣に屬す　この身は浮雲の如し　須臾
に變滅す　この身は電の如し　念々に住まらず　この身は主なし　地の
如しと爲す　この身は我なし　火の如しと爲す　この身は壽なし　風の



如しと爲す　この身は人なし　水の如しと爲す　この身は實ならず　四
大を家と爲す　この身は空たり　我々所を離る　この身は知なし　草木
瓦礫の如し　この身は作なし　風力の轉ずる處なり　この身は不淨なり
穢惡充滿す　この身は虛僞たり　假りに澡浴衣食を以てすと雖へども
必らず磨滅に歸す　この身は災たり　百一の病惱あり　この身は丘井の
如し　老の逼る處となる　この身は無常なり　要當さに死すべきものと
なす」と　讀んで玆に到らば　吾れ加藤重氏ならざるも　佐藤憲淸ならざ
るも　遠藤武者ならざるも　誰れか身の無常なるを感せざるものあらん
や

生れては終に死ぬてふことのみぞ
定めなき世に定めありけり

是れ足利直冬の詩にあらずや　夫れ十二因緣の流轉は　車の庭にめぐる

が如し　鳥の林にあそぶに似たり「紅花の春の朝　紅綿繡の山　粧ひをなすと見えしも　夕の風に誘はれ　紅葉の秋の夕べ　疊纈纈の林　色をふくむといへども　朝の霜にうつろふ　松風蘿月に言葉をかはす賓客も去つて來ることなし　翠帳紅閨に枕をならべし妹背も　いつの間にかは隔つらん　凡そ心なき草木　情けある人倫　いづれあはれを遁るべき」然らば則ち　この身愈々以て恃むに足らず「かくは思ひ知りながら　或時は色に染み　貪着の思ひ淺からず　又或時は聲を聞き　愛執の心いと深き　心に思ひ口にいふ　妄舌の繰となるものを　實にや皆な人は　六塵の境に迷ひ　六根の罪を作る事も　見る事　聞く事に迷ふ心なるべし」是れを以て　金剛般若波羅密經に曰く　諸の菩薩摩訶薩は　應さに是の如く清淨の心を生ずべし　色に住して心を生すべからず　聲香味觸法に住して心を生すべからず　應さに住する所無ふして　而も其の心を生ず





べしと　品性の修養　これを措て他に最良の道なしと信ず　抑も品性の修養は　文字語言の末にあらず　親しく修證を積んで　始めて得るものなり　六祖曾て之れを此の經に得たり　人あり　南泉和尚に問ふて曰く　黄梅門下　唯だ盧行者のみ　何を以て獨り衣鉢を得るやと　盧行者とは即ち六祖の事なり　南泉曰く　只だ盧行者のみ一人　佛法を解せずして只だ其の道を會することあり　所以に衣鉢を得たりと　問者曰く　道とは如何んか會せん　南泉曰く　本師の云ふが如し　如來道場所得の法は是の法は法にあらず　亦た非法にあらず　我れ此法に於て　智も行することと能はず　目も見ること能はず　行處あることなし　慧も通ぜざる處あり　明も了すること能はず　問ふとも答ふることあることなしと　然らば則ち　文字言説の相を捉らへて　測り知るべきにあらず　宜しく大死一番　工夫三昧に入るに非ざれば　爭でか其の道に透達するを得んや

或人曰く　子が云ふ處の如くんば　是れ非常の人の研究すべき道にして尋常人に在ては　殆んど至難の事に屬す　縱し尋常人も研鑽の久しきこゝに到達し得るものとするも　此の生存競爭の世　斯る閑日月なきを奈何んと　是れ何人も修禪を拒む辭柄にして　本書の主人公たる　相摸太郎時宗も亦た此の事を云へり　曰く　俗家事務を免れず　光陰の乏しきを奈何せんと　佛光禪師之れを誨へて曰く　行住座臥一切の事務　是れ最良の修禪道場なり　是れ只管打座の學場なりと　喫飯　放尿　談話　執勢　往くとして修禪道場ならざるはなし　農家は鋤を把る上に於て商人は牙籌を握る上に於て　文士は筆を揮ふの上に於て　武人は劒を磨く上に於て　見るもの　接するもの　觸るゝもの　皆な修禪の好材料ならざるはなし　時宜によりては　酒肆淫房も亦た是れ好箇の修禪場ならん　然れども　個は是れ正宗の名劒を試むると均しく　達人に在ては





可なり　生兵法大疵のもと　一知半解の徒をして　此の言を弄せしむべからず　故に瑩山國師は曰く　海邊　酒肆　淫房　寡女　處女　伎樂の邊　幷に打座すること勿れ　國王　大臣　權勢の家　多欲　名聞　戲論の人も　亦た之れに近づき住することを得ざれと　亦た是れ妄心を鎭撫し　寂靜を期する一法なり　古偈に云はく　妄息めば寂則ち生ず　寂生ずれば知則ち現す　知生ずれば寂已に捨つ　了々として唯だ眞のみ見ゆと妄を息め寂に入るの法　座禪を措て他に良法なし　是れ永平首祖が念佛修懺　看經を用ゐず　只管打座して始めて得てんと　喝破せらるゝ所以なり　閑あらば則ち打座して　心身の寂靜を期せよ

讀者は　時宗と佛光禪師の章に於て　彼れ時宗が此の打座に就き　如何に苦心を費したるやを記憶せらるゝならん　公等試みに打座一番せよ

時宗が　下臣の處置又は言語の邪魔となるを嘱つ如く　公等も亦た家族

の者の處置又は言語の邪魔となりて　種々の妄想に打たるゝならん　又時宗が「既に已れが念に貪着するが故に　益々念の息まざるを悟り　翌年の頃よりは餘程心も靜まり　行住座臥に心を奪はれぬ樣なりたり」と云ふが如く　公等も打座の久しき　此の境に遊ぶの日あるべし　更に又た時宗が「尙ほ務め行くうち　いつとなく心も晴れ　鏡の如くなるを見此處ぞと喜びあぐみて　又暫くの忘想起りて　一度晴れたる心も見へずなりぬ」と自白せる如く　公等も一旦晴れんとしたる心地を　又むら雲に鎖ざし去らるゝの時あらん　こゝぞ即ち學般若の菩薩の應さに大勇猛心を發すべき處なり　若しそれ茲に於て屈こたるならば　始より打座せざるを可とす　故にきかぬ氣の時宗は　一層勇を鼓して　打座を力め　竟に左の語を吐くに至れり　曰く「更に又た力めて漸々道に近づき　屢々禪師の公案を得　鐵槌を得て　心膽の狹小なるを憂へたる心の耻しく





何故に凡天を悲まざりしやを憾む　當時膽の狹小も打忘れて　又た怯るゝもの一つもなかりき」と　公等も孜々　兀兀として　息まされば　何れの時か　漆桶を打破するの期あるや必せり　時宗何人ぞ　吾れ何人ぞ爲すあるもの亦た如此し

余　時宗を崇敬し　彼れに私淑して　彼の五事の要訣に參すること　茲に年あり矣　曰く　外界の庶事物に心を奪はるゝこと勿れ　曰く　外界の庶事物に貪着すること勿れ　曰く　念を止めんとすること勿れ　念を止めずある勿れ　唯だ一念不生をつとむべし　曰く　心量を擴大にすべし　曰く　勇勢を保維すべしと　之れを心に銘じ　之れを身に體し　朝夕閑あれば拈し來つて之れを試む　聊か得る處あるが如し　余は望む讀者も亦此の五事に參して　心地を開明せられんことを　而して余は此の五事に參するの外　特に余をして感激せしめしは　「時宗を棄て去り來

れの警語にあり　是れ最も簡潔にして　而かも此の五事一切を含有して餘す處なし　千百の公案を通過し來るも　恐らく　此の一句の警語の旨を得るに過ぎざらん　是れを以て　余は常に「時宗を棄て去り來れ」「秋水を棄て去り來れ」と　口に　心に　之れを念じて　以て身の塵勞を拂ふに力めり　古哲曰く　胸中の荊棘を剖き去つて　以て人我の往來に便す是れ天下第一の快活世界と　余が彼の「時宗を棄て去り來れ」の警句に參したる刹那は　殆んど古哲の此の語を自己に吸收し來るの感あり　金剛般若波羅密經に曰く　無我　無人　無衆生　無壽者を以て　一切の善法を修すれば　即ち阿耨多羅三藐三菩提を得と　「時宗を棄て去り來れ」の意蓋し此の經の外に出でず　其の德　不可思議にして洪大無邊なり　余は切に望む　讀者も亦た時宗に傚ふて　先づ其の自己を棄て去り來つて參得せられんことを　夫れ舜を眞似るものは　舜が友たり　時宗を學ぶ





ものは　亦た時宗の友たらずや

禪は不立文字敎外別傳なれば　固より依る處の經論あらず　故に禪は唯だ心要を錬るを以て唯一の務めとなし　假令ひ碧巖を讀むとも　碧巖に讀まれざるを心掛けざる可らず　故に「名衲　禪を談ずるに　必らず經を執つて　座に上れば　便ち三分の禪理を減ず」とさへ云へり　況んや吾等初心の學人に於てをや　然るに近時の禪を學ぶもの丶多くは　寧ろ經論祖錄に重きを置きて　一事も多く知るを以て得意とするの傾きなきにしもあらざるが如し　是れ所謂ゆる　文字禪にして　佛心宗の本旨を去ること遠しと謂ふべし　公案に參せんと欲せば「やみの夜に鳴かぬ烏の聲きけば　生れぬさきの　父ぞ戀しき」これにて可なり　必ずしも枯屈贅牙　讀み難く　解し難き文字をだとるを要せず　縱し又　碧巖其の他の祖錄に參すとも　千百の公案　必ずしも盡く通過するを要せず　昔

者　北條早雲　儒者をして三略を講せしむ　開卷直ちに「それ主將の法は　務めて英雄の心を攪るに在り」と云ふに至るや　早雲曰く　止めよ　吾れ既に之れを得たりと　又說かしめず　禪を學ぶもの　亦た宜しく早雲の如くならざるべからず　上杉輝虎の宗謙禪師に參するや「達磨不識」の一則を以てす　是れ碧巖を開くと同時に直ちに眼に映ずる處の文字ならずや　而して　輝虎直下に徹底し　自ら稱して不識菴と云ひ　師の一字を乞ふて　謙信と名乘る　早雲と云ひ　謙信と云ひ　彼等が眼光の炬にして　呑込みの早き　眞に是れ獅子兒　彼の痴狗が塊を逐ふの比にあらず　是れを以て　禪を學ぶものは　一心不亂　唯だ座禪を爲すべし　多く書を讀み　文を講ずべからず　是れ永嘉大師が「吾れ早年よりこのかた　學問を積み　亦た曾て疏を討ね　經論を尋ぬ　名相を分別して休することを知らず　海に入り沙を算へて　徒らに自ら困せり　却て如來





に苦ろに呵責せらる　他の珍磬を數へて何の益かあらん　從來蹈躇して虛りに行することを覺ふ　多年枉げて風塵の客となる」と　懺悔せらるゝ所以なり　絕大の偉人大德たる永嘉大師にして然り　吾等初心の後學今この垂誡に接して　深く戒飾する處なくして可ならんや　若しそれ然らず　座禪を後ちにして　區々の祖錄をひねくり　以て大に得る處あらんとするは　殆んど百年黃河の澄むを俟つの類なり　嗚呼座禪なる哉

今この座禪は　即ち如來禪にして　禪中の王なり　自ら天台止觀の禪定と異なり　故に瑩山國師は　座禪用心記に　其の次第を述べて曰く

それ座禪は　敎と行と證とに非ざれども　而かも此の三德を兼ねたり　いはく　證は悟りを待つを以て則と爲す　是れ座禪の心ならず　行は眞履實踐を以てす　是れ座禪の心ならず　敎は斷惡修善を以てす　是れ座禪の心ならず　禪中たとひ敎を立つるも　而かも居常の敎にあら

ず いはく 直指(ちょくし)單傳の道 擧體全く說話 語本と章句を沒し 意盡き理窮るところ 一言にして十方を盡くし 糸毫も未だ擧揚せず 是れ豈に佛祖眞正の敎にあらずや 或は行を談ずといへども 又た無爲の行なり いはく 身に所作なく 口に密誦なく 心に尋思なし 六根自ら淸淨にして 一切汚染せず 聲聞の十六行にあらず 緣覺の十二行にあらず 菩薩の六度萬行にあらず 一切爲さず 名づけて佛と爲す 只だ諸佛の自受用三昧に安住して 菩薩の四安樂行に遊戲す 是れ豈に佛祖深妙の行にあらずや 或は證を說くといへども 無證にして證す 是れ三昧 王三昧 無生智發現三昧 一切智發現三昧 自然智發現三昧 如來の智慧開發明門 大安樂行法門の所發なり 聖凡の格式を超へ 迷悟の情量を出づ 是れ豈に本有(うん)大覺の證にあらずや 又た座禪は 戒と定と慧とに非ざれども 而かも 此の三學を兼ねたり いはく 戒は是れ防非止惡と 座禪は擧體無二と觀んず 萬事を拋下し 諸緣を休息し 佛法も世法も管せず 道情も世情も雙(ふたつ)ながら亡(なく)して 是非もなく 善惡もなし 何んの防非か之れあらんや 此れは是れ心地無相の戒なり 定は是れ觀想無餘と 座禪は 身心を脫落し 迷悟を捨離し、不變 不動 不爲 不昧 癡の如く 兀の如く 山の如く 海の如く 動靜の二相 了然として生せず 定にして定相なし定相なきが故に 大定と名づく 慧は是れ簡擇覺了と 座禪は所知自ら滅し 心識永く忘る 通身慧眼にして 簡擇あることなし 明らかに佛性を見て 本と迷惑せず 意根を座斷して 廓然として瑩徹す 是れ慧にして慧相なし 慧相なきが故に 大慧と名づく 諸佛の敎門 一代の所說 戒 定 慧の中に惣(すべ)て收(をさ)めずと云ふことなし 今座禪は 戒として持せざるはなく 定として修せざるはなく 慧と

して通ぜざるはなし　降魔　成道　轉輪　涅槃　皆な此の力に依る

神通妙用　放光説法　盡く打座に在り

と　座禪の功德のきはまり無きを説かれたり　國師はこれより　座禪の用心に就き

座禪せんと欲するものは　先づ靜かなる處宜し　茵褥は須らく厚く敷くべし　風煙をして入らしむる勿れ　雨露をして侵さしむる勿れ　膝を容るゝの地を護持して　打座の處を清潔にせよ　昔人金剛座に座し磐石の上に座するの蹤跡ありといへども　亦た座物あらずと云ふこと

なし　座處は　當さに應さに晝明かならず　夜暗からず　冬暖かに夏冷かなるべし　是れその術なり　心意識を放捨し　念想觀を休息し作佛を圖ること勿れ　是非を管することなかれ　光陰を護惜すること頭燃を救ふが如くせよ　如來の端座　少林の面壁　打成一片　都べて





他事なし　石霜枯木に擬し　太白座睡を責む　燒香　禮拜　念佛　修懺　看經を用ゐず　只管ら打座して始めて得てん

と　親切丁寧　慈母の嬰兒を愛する如し　國師は茲に於て筆を轉じて座禪は如何に爲すべきものなるかを垂示せられたり　普勸座禪儀に示す處と　略ぼ相同じ　曰く

或は結跏趺座　或は半跏趺座　結跏の法とは　先づ右の足を以て左の脛の上に置き　左の足を以て右の脛の上に置き　寛く衣物を繫けて齋整ならしむべし　次に右の手を以て左の足の上に安んじ　左の手を以て右の手の上に安んず　兩手の大指　相柱へて身に近づく　柱指は對頭して　當さに臍に對して安んずべし　正身端座し　左に側ち　右に傾き　前に躬り　後へに仰ぐことを得ざれ　耳と肩と　鼻と臍とは　必らず俱に相對し　舌は　上の顎に柱へ　息は鼻の通するに從かす　唇

と齒は相着け　眼は須らく正さに開いて　張らず　微ならざるべし

如此く調身し已つて　欠氣安息す　所謂ゆる　口を開き氣を吐て　一兩息するなり　次ぎに須らく座定つて　身を搖すこと七八度　龕より細に至り　兀々として端座すべし　此に於て此の不思量底を思量す

不思量底如何んが思量せん　いはく　非思量　是れ乃ち座禪の要法なり

と　這の不思量底の非思量　是れ吾人が一大難關たり

箱根八里は　馬でもこすが　こすにこされぬ　大井川

嗚呼這の非思量底如何んが思量せん　古哲曰く　名利の關を透得するは是れ小休歇　死生の關を透得するは　是れ大休歇と　是れ王陽明が「吾れ得失榮辱は皆な度外に付するも　猶ほ生死の一念に於て徹底せざるものあり」と歎じ　石槨を爲りて其の中に端座せし處にあらずや





枯木岩前差路多　行人到盡蹉跎
鷺慈立雪非同色　明月蘆花不似他
了々時無可了　玄々處亦須呵
般勤爲唱玄中曲　空裡蟾光撮得麽

此の偈　聊か以て不思量底の消息を洩らすに足らんか

余はこれより　余が非思量底に於ける余の所感を述べて　世には余と感を同ふするものもありやを問はんと欲す

この一節は　余が思ひ出づる儘　言文一致體に書したるものなれど　今更ら之れを書改むるの必要を見ずと信ずるを以て　其の儘　茲に掲ぐることとしたり　讀者之れを諒せよ

非思量底に於ける余の所感

非思量底　如何んか思量せん　人若し此の堂に透達し得ば　參禪の能事

は了るのである　非思量底の前には　智慧も入らない　學問も入らない
獨り入らないのみならず　有れば却つて　邪魔となるのである　黄蘗は
百種の多知は　無求最大一の道人に如かずと　喝破されたが　非思量底
の前に立つ人は　如此き人でなければならぬ　既知の理　又は事から
未知の理　又は事を推知して　たぐり付くは　智者　學者の能くする處
であるが　非思量底の前には　其の所謂ゆる　理や　事は相待の理や事
であつて　黄蘗が　若し因に渉らば　常に須らく物を假るべし　甚麼の
了する時あらんと　叱り飛ばしたやうなもので　智者其の智を失ひ　學
者其の學を失ふて　曾て其の誇りとせし　智や　學の所知が　却つて障
りとなるのである　茲に到ては　貪　瞋　痴の結晶體たる　無學文盲の
野人と　唯だ五十歩百歩の差のみである　若しも強ゐて　非思量底の前
に立つて　其の智や學を　少分でも遺へば　百年河の澄むを待つと同じ





く　いつまでも吳下の先生で居なければならぬ　左りとて　其智や學を
捨つること　敝履を捨つる如く捨て去つて非思量底の前に立てば　唯だ
眠くなるばかりである　これでは成らぬと　大勇猛大精進して　心を髮
際眉間に向くれば　梟の眼を見張るやうに　唯だ眼をぱち〳〵させる位
が關の山である　否らざれば　最早や多少の智慧や　學問が　非思量底
の屋漏に　狐鼠々々潜んで居るのである　考へてはいけず　考へなくて
はいけず　嗚呼如何んせは可ならんかとは　初心の參禪者の口へ出して
こそ言はね　皆な異口同音に唱へらるゝ　歎息の聲であろふと思ふ　一
超直入如來地に達する　英靈漢はいざ知らず　臨濟ほどの豪傑でも　前
後十八年もやり通ふしたと云ふから　碧巖や　從容錄位の提唱を　二年
三年聞たからとて　中々其の堂を窺ふことは容易の事ではない　事によ
ると肝心の非思量底は　いつも御留守で　却つて奇拔な禪語などを　恭

悅がりて　鬼面人を嚇すの材料となり易いのは　學者　智者の陷りやすい禪病である　日蓮の禪天魔と喝破した處である

同じ禪でも　殊に臨濟派の人には　此の御天狗樣が多いよふに見受けられる　曹洞派の人には此の病が少い代りに　いつも非思量底の前に　居眠りをして　活潑々地の氣に乏しいのが　此の派の人に多いやうである

兎にも角にも　學般若の菩薩は　大死一番して非思量底のある物を捉へ來らねばならぬ　然るに捉へんとする非思量底は　こゝを去ること遠からざるものとの　見當は付けたれども　扨其の矢を番へて　よつぴきひやうと放つべき的が見えぬ　彼れには眼もなく　手もなく　足もなく頭もない　急に捉へんと手を出せば　彼れは後ろに居て　舌を出して笑ふて居る　こゝが道吾和尙の「夜裏に枕子を摸る」と云つた處で　先づ吾れ々々の所知の眼を閉ぢて　見ねばならぬ處である　强ゐて其のものゝ





偈げを寫して見せろと云つたならば

素練不書意高哉　却着丹青落二一來

無一物處無盡藏　有花有鳥有樓臺

とでも言つた處であろふ　心と云ふも　眞如と云ふも　假りの名で　實は非思量底のもので　癡の如く　兀の如く　山高く　海深しで　なんとも言ひやうのないもので　一休の所謂ゆる　墨繪にかいた松風の音のやうなもので　言說の相を離れ　心緣の相を離れて居るから　古の大德も「汝ぢ道を見ずや　手を撒して君に似すに　一物なし　徒らに謾りに數千般を說くことを勞す」と　垂示せられたやうな譯である　寶藏論には　有に非らず　空に非らず　萬物の宗なり　空に非らず　有に非らず　萬物の母なり　これを出れども方なく　これを入れども所なく　萬有を包含すれども　而かも　事とならず　萬端に應化すれども　而かも　主とな

らず　道性かくの如し　豈に度量すべけんや　見性の時　自然に披露す」と云つてある　其の度量すべからざる底のところ　こゝが非思量底の本面目であろふと思ふ　此の關門は　韓愈が　雲は秦嶺に横たはつて家何くにかある　雪は藍關を擁して馬前まず處の沙汰でなく　一寸先きは眞のやみで　一歩も蹈み入るべき手掛りを見出し得ぬのである　故に古德も　此の事は空に似て空ならず　有に似て有ならず　隱々として常に見ゆ　只だ是れ其の處所を求むるに　不可得なり　是を以て　若し定て空なれば則ち斷見に歸す　若し定て有なれば則ち常情に落つ　若し處所あれば則其の境を成す」と　云はれてある　こゝが黃蘗の學人の問に答へてたとひ爾ぢ見ることを得るも　元來祇だ是れ境を照らす心　人の鏡を以て面を照らすが如し　縱ひ眉目分明なることを得とも　元來祇だ是れ影像なり　何んぞ汝が事に關からんと　喝破された處で　到底心意識の測





り知るべき境界ではないのである　論じて玆に到ると　吾人が螢雪の苦を積んで識得した　黃蘗の所謂ゆる多知は　錙一文の價値もなく　たま々々多知が　却つて悟道徹底の障碍となつて　增上慢の質は　とんでもない野狐禪となることもあるのである　然れども　斯く心身の動搖して自性淸淨の見えぬは　未だ妄の息まぬからである　妄の息まぬのは　畢竟座禪の足らぬ罪であつて　徒らに言句の末につき經ふ科である　故に智覺禪師は「妄息み　心空して　眞知自ら現す　若し計校を作さば　轉た妄心を益す　但だ妙悟の時　諸緣自ら絕す」と說かれたが　實に味ふべき名言であると思ふ　淵に臨んで魚を羨むよりも　退いて網を結ぶに如かずとせば　文字言句の間に沒頭して　涉獵の多きを貪らんとするよりも　心を丹田にすへて　一意專念座禪するのが　成道の捷路である否獨り捷路であるのみならず　これを措て　他に其の道はないのである　如

何なる英雄でも　豪傑でも座禪せずして　大悟徹底したものは獨りもない　釋尊が　明星を見て大悟されたのも　座禪を積まれた結果で　古佛の悟道の頌にも『星に因て悟を見る　悟り罷んで星にあらず　物を逐はざればなり　是れ無情なるにあらず』と書いてある　釋尊が星を見て大悟されたのは　其の機緣の熟したのであつて　誰れでも星を見れば悟ると云ふ譯にはいかぬ　桃の花を見て悟るものもあれば　竹の戛とした音に徹底するものもあれば　雪隱の戸の開く音で頓悟するものもある　これは皆な　機緣の熟した刹那の現況であるのである　太田道灌が行商に逢ふて　種々の雜話を交換しながら　ふと行商が　京都といへども　其の風土は別に他國とかはらざれども　唯だ鐘の聲のみは多しと　云へる話頭に接し　忽ち日頃座禪して工夫せる三昧の肯綮に適中し　入室して其の師に見へしに　師曰く　即今主人公如何ん　道灌聲に應じて　山は月





樓の鐘に應ふと　答へて　其の印可を得たりと聞く　これは行商の話頭が　端なく其の機緣となつたのである　因此觀之　行住座臥　喫飯　放尿　談話　執務　一つとして　悟道の機緣たらざるものはないのである

道灌の扇ケ谷の風呂場に於けるや　刺客曰く　汝ぢ平生好んで詩歌を善くす　此の時如何んと　道灌　大身の鎗を身に受けながら　從容として

かゝる時さこそいのちの惜しからめ
かねてなき身と思ひしらすは

この國詩は　決して時宗が師　佛光が　電光影裏斬春風の詩に比して一歩も讓る處はないと思ふ

又た後醍醐天皇中興の謀主たる　中納言資朝　この人は禪を學んだか學ばぬかは　詮索もして見ぬが　彼れが佐渡に於て　斷頭場の露と化する時

五蘊假成形　四大今歸空
將首當白刃　截斷一陣風

又た其の資朝の志にも劣らぬ　果敢の公卿　俊基も　鎌倉龍の口の刑場に於て

古來一句　無死無生
萬里雲盡　長江長清

の一偈を殘して　斬に處せられたが　此の二卿の如きは　慥かに座禪の功を積んだ人だと思ふ　其の故如何んとなれば

後醍醐天皇は　紫野大德寺　大燈國師の御弟子とならせられて　充分に座禪三昧に入られしことは　同寺の重寶たる　天皇御宸筆の偈を拜觀しても分るし　又た瑩山國師に　十ヶ條の御下問を降されたのを見ても分る　そこで　天皇が最も腹心と思召さるゝ資朝　俊基などが　禪をせぬ





氣遣ひがないと云ふのは　其の周圍の境遇と云ひ　且つは　此の二卿が最後の偈を見ても　餘りあるのである　なにも中納言藤房ばかりが　忍らいと云ふ譯はない　武將にも楠氏ありではないか　皆な禪者である

當時　北條追討はなか〳〵容易の業ではなかつた　然るにそを斷然として　思し召し立ち　又た之れを翼贊し奉りて　其の股肱となり奉る資朝も　俊基も　皆な當時の禪定力から割出して仕た事であると思ふが　恐らく間違は無かろふと思ふ　若し事成就せば　この二卿は　慥かに維新の三條岩倉といふ處である　大石良雄が　硯の機緣に因つて徹底し　花は三芳野　人は武士の典型を殘したのも　亦た其源因は　彼が打座兀々として三昧に入つた賜ものである　近くは　小原鐵心が　其の大垣を轉じて　桑名や　小田原の如くならしめず　一躍して　維新の功藩たらしめたのも　亦た座禪の功德である　大垣藩は人も知る如く　彼の長州が

京都に亂入せし時 疊を積んで障壁と爲し 大に長州勢を 一齋射擊の下に惱ましたる 佐幕派なりしが 鐵心が 心氣一轉 忽ち戈をかへして王政復古の鴻業を翼贊したのは 禪の力であると云ふことである 聞く鐵心は磊落奇偉 狀貌魁梧 擧止嚴正 文學を嗜好し 又た夙に禪要に參じたものである 慶應の末年 大垣藩も 他の諸藩と同じく 向背に迷ひ居りしに 藩老小原鐵心 兼ねて禪要の爲め 相知れる鴻雪爪を彦根の清涼寺に叩き 肝膽を披いて 治安の策を問ふたのである 然るに雪爪は容易に之れに答へず 鐵心を引いて 堂內うすぐらき處に到り先づ香を焚いて 燈火青熒の下に 靜座せしめたのである 鐵心はこゝに於て 打座兀々方さに定に入つたのである 忽ちにして鐵心は大喝した 雪爪其の聲に應じ 棒を揮つて其の肩を打ち「月落不離天」との鐵案を下した こゝに於て鐵心は 夢の覺めたる如く 忽ちに徹底したと云





ふことである この事を 鵞津毅堂が賛めて「雪爪翁の一棒 能く鐵心をして 王政中興の名臣たらしむ 然れば雲門の三十棒に優る萬々」と云つたが これも偏へに 平素鐵心が座禪をして居たお蔭げで なにも一朝一夕の駈出しで 徹底した譯ではない 西鄕南洲なども 鹿王院義堂から得たといふが 彼れが未だ京都にも出でず 鹿兒島に居た頃から大久保甲東等の有志と 座禪をして 心要を錬つたと云ふ事は 彼れが傳記にも書いてある 此れに因て之れを觀れば 彼れが無念無想の妙域に達するまでには 鹿兒島に 大島に 幾多の光陰を積んで 座禪した賜ものであろふ

座禪の難有きは 座禪して其の味を嘗めたものでなくては分らぬ 門外漢に向つて 口を爛らし 筆を禿して 其の功德を說くも 彼等をして納得せしむるは 殆んど至難の業である なぜと云へば 座禪の面目は

非思量底を思量するので　何んとも言ひやうはないのである　故に先聖悟道の頌にも「有無去來の心永く息み　内外中間すべてなし　如來眞佛の處を見んと欲せば　但だ石羊の駒を生かし得るを看よ」と書いてあるこれを智覺禪師が　其の句に就て「如此く妙達の後ちは　道も尙ほ存せず　豈に更らに知解と　會と　不會との忘想を論ずべけんや」と說かれたが　知解も入らず　會も入らず　不會も入らず　これらが非思量底の眞空妙有の消息を洩らしたものであろふと思ふ　他の語を以て之れを言へば　融大師が「瞎狗茅叢に吠ゆれば　盲人賊虎と唱ふ　聲に循ふが故に迷ひを致たす　まことに目に覩ることなきに由るが故に　若し心開いて理を照らすことを得るの時は　諸見皆な絕して佛法の是を見ず　世法の非を見ず　自性の中には　言思道斷するを以ての故に」と說かれたが是れも亦た非思量底の好音信であろふと思ふ　更らに祖師の偈を擧げて





之れを言へば「如來の一切の法は我が一切の法を除く　我れに一切の心なし　何んぞ一切の法を須ゐん　故に知んぬ　已の眼若し開くれば　眞明自ら發す　所治の迷悟見病既に亡すれば　能治の權實法藥自ら廢す」と智覺禪師は　この意をおしひろめて「夫れ此の法を悟るものは　他の智と異術とを假るにあらざるなり　或ひは直ちに見るものは　藏を開いて寶を取り　蚌を剖いて珠を得るが如し　光り襟懷に發して　影法界を含む」と云はれた　こゝが永平首祖の普勸座禪儀の末尾に「寶藏自ら開けて受用如意ならん」と　結ばれた處であろふ　吾人が逢着して　非思量底の曙光を拜せんとするものは　この眞如の面目であろふと思ふ　華嚴經の頌に「法性本空寂にして　取るものなく　亦た見るものなし　性空即ち是れ佛なり　思量することを得べからず　若し直下に之れを信せず　念を起こして馳求するは　癡人の空を避くるが如く　頭を失ふて狂走する

に似たり」と　是れが即ち非思量底の眞面目であろふと思ふ

因此觀之ば　非思量底の前には智慧も入らない　學問も入らない　否な

獨り入らないのみならず　有れば却つて邪魔となる　融大師云はずや

『凡聖を分別すれば　煩惱轉た盛んなり　計校すれば常にそむく　眞を求

むれば正にそむく』と　余は此等の見地を以て　非思量底を見んと欲する

ものである

以上は余が非思量底の感に係る

古人いはく　人　道を得ずんば　生死老病四字の關　誰れか能く透過せ

ん　獨り美人名將　老病の狀　尤も憐むべしと爲すと　牽搭婆小町の果

てを視よ　清少納言の終りは如何　宇治の關白道長は如何　平相國清盛

は如何　淳和奬學兩院の別當源氏の長者將軍德川家齋は如何　糸平は如

何　紀の國屋文左衛門は如何　生死事大無常迅速なり　彼等が　色聲香





味觸法の奴隷となりて

この世をば我がよぞと思ふ望月の

かけたることもなしと思へば

などゝ　太平樂を唄ふといへども　一旦無常の風に誘はるゝや　殆んど木

の葉の散る如く　其の自負も　驕慢も　奢侈も　太平樂も　消えて痕を

とゞめざるに比すれば　未だしも祇王祇女が髮をおろし　佛と共に念佛

三昧に入り　西行文覺が洒々落々として　此の世を翫ぶの快且愉なるに

如かず　これを　世を救ひ　民を養ひ　外侮を挫き　國難を靖んじ　王

に勤め　主に殉し　難に處して泰然自若　禍を轉じて福と爲す　時頼

時宗　正成　良雄　道灌　鐵心等と　日を同ふして論ずべきにあらず

國家千年　彼等を要するの日なく　而して一日も　斯の人なかるべから

ず　彼の伊藤公の如きは　天眼子の云ふ如く　唯だ這の現實社會を代表

する見本の人に過ぎずして　我が問はんとする武士道　即ち國家の汚隆休戚に關する人は　別に其の人ありて　國家の性命は　纔かに此等一部の人士に憑つて支持せらる　然るに世人の多くは　此れを學ばずして却つて彼れを學び　其極や　奢侈　淫逸　驕慢　不倫　徒らに物質の末を逐ふて　自性の本源を顧みざるもの　滔々たる天下多くは皆な是れなり　若し夫れ刑律と黄金の外　世にこれを拘束するものなくんば　是れ相率ゐて國を亡ぼすの賊なり　吾れ日蓮ならざるも　豈に亡國を絶叫せざるを得んや　是れ余が　古今の偉人に就き　特に時宗其の人を選み武士道と禪の由來を論じ　今の世を憂ひ時を慨くの士をして　復た時宗たらしめんとするの微意に外ならず　嗚呼世界の平和は　未だ武裝の戒めを解かず　千秋萬歲永く戈を止め　我が建國の精神たる　武の武たる所以を發揮し　宇内萬邦の赤子をして　太平を謳歌せしめんこと　唯だ





大慈大悲の心に在り

# 第七章　北條氏と禪の關係

空前絶後の罪惡——北條氏七代を抹殺す——坊主が憎けりや袈裟まで憎くし——山陽と北條氏と禪——北條氏の悖逆に安んずる所以——藪から棒——口に塊擬を唱へて禍心を包藏せるもの——死んだ子の歳を數へて緣なき人を怨む——悖逆無道皆な保元平治に見聞した るもの——天道是歟非歟——准后親房の頼朝泰時論——親房と山陽の論理の徑庭——國家の百年の爲め立論せし神皇正統紀——陪臣として權を執る事は和漢兩朝に先例なし——北條氏の七世の久しきに傳ふる所以——因果應報の理——驕る平家に二代なし——山陽が源氏を助けて北條氏を亡ぼす獻策——歐陽永叔の本論と韓愈の佛骨の表と山陽が禪學論——柄鑿矛盾といふよりも寧ろ本氣の沙汰にあらず——山陽が白を切ることろ——泰時時頼時宗が勤儉尚武の賜しの





今の元勳と因果應報の理——承陽大師の辨道話と裴休の人と爲りと今の元勳諸公

上下茫々二千五百載の久しき　蘇我の入鹿父子を始め　世々不臣のものの往々にしてなきにしもあらずと雖へども　北條氏ほど蛇蝎視せらるゝものはなかるべし　蓋し平相國入道驕傲比なしといへども　桓武葛原の御胤を忝ふせし　平家の嫡流　足利尊氏僭越陸梁を極むといへども　猶ほ是れ清和の御末なるに　北條氏に至りては　源氏の隷屬　陪臣の身を以て　國命を制し　恐れ多くも　三上皇を三州に流し奉るなど　空前絶後の罪惡を犯し　而かも　七世の久しき　他の諸家が　忽ち亡び　又は擾亂を極むるに似ず　國治り民安く　海内靜謐なりしこそ　沙汰の限りなれ　これを以て頼山陽は　北條氏の記錄を目して「北條氏の事は　吾れこれを言ふに忍びざるなり　而して　もろ々々其の事を叙するや　晦澁

不兜にして　亦た文飾に疑はしきものあり」との想像を以て　暗に北條氏が善政をも併せて　中傷する如き語氣を漏らし　而して　其の楠氏論の結尾に「余故に楠氏の事を叙し　以て源平氏に繼ぐと云ふ」との　一筆を下だして　北條氏七代を抹殺して　將門史の外に放逐したるが如き（余が著賴山陽修史と山陽の部參看）　准后親房卿の公平無私に及ばざること遠しと謂ふべし　而して　彼れは北條氏を惡むの餘り　幵が歸依せる禪學までを罪せり　俚諺に「坊主が憎けりや　袈裟まで憎し」とは　山陽氏の北條氏——對——禪學論なり　これ余が本書の立場として一言せざるべからざる處なり

なるほど義時は　本朝漢土を通じても比類なき姦賊なりとは　新井白石も其の著讀史餘論にこれを論ぜり　余も亦た白石山陽と同じく　義時は無前の逆賊なりと斷言するを憚らざるものなり　然れども　北條氏が禪に歸依したるは　最明寺時賴にはじまる　彼れは泰時の孫にして　義時





に取りては其の曾孫たり　今其の曾孫たる最明寺が禪に歸依せしとて其の因緣が義時の罪惡に溯り　禪の罪になるとは無稽も亦た甚しき僻論にて　殆んどこれを駁擊するほどの價値もなけれど　世には山陽が日本外史を讀むの序には　又た其の詩文を愛讀するものも亦た多く「北條氏修禪學論」などは　讀者の眼にも一たび入りたる事と信ずるを以て　今其の所謂ゆる禪學論なるものを披露せんと欲す　曰く

甚い哉異端の世に害あるや　吾れ北條氏の事を觀て以て之れを知るあり矣　夫れ北條氏は　源氏の隸屬を以て身を起こし　其の富貴を共にし　其の恩眷を受く　又た何の足らざる所あらん　乃ち陰賊の心を以て　詭祕の計を濟し　弑して而して之れを簒ひ　其の慘毒を極む　曾に鬼蜮の如きのみならず　而るに晏然としてこれに處して疑怛あることなし　是れ必らず恃む處あつて然るならん

夫れ佛敎の我邦に來る　すでに千歲に垂んとす　而して　所謂ゆる禪は鎌倉にはじまりて室町に盛なり　その敎を爲す所以のもの　天地を虛假し　萬物を空寂し　其の身と心とを木石灰燼にす　凡そ榮達權利の爭ひ　美色曼聲腹味華服の好みに於て　一も以て其の念を動かすことなし　是れ狷介の士が一己を治むる所以なり　何ぞ國家にあづからんや　然れども　吾れ嘗て深くこれを考ふるに　北條氏の悖逆に安ずる所以のもの　盡く禪敎の致たす處たるを知れり　何を以て之れを言ふや　夫れ頑愚の人は姦惡を爲す能はず　能く姦惡を爲すものは　必らず巧智なるものなり　巧智なるものはその性情の感　必らず常人よりも過ぎたり　今夫れ一錢を人より偷み　一事を以て人を欺くも　其の心や必らず慊たらざるものあり　況んや君臣世々契り　恩義結ぶ處嘗に手足心膂の如きのみならず　一たびそむく處あらば　能く懷に怒然





たるもの鮮なし　今北條氏は　その三世襲恩の君に　骨肉をして自ら相剪屠せしめ　其の國を冥々の中に奪ふ　唯だ此れのみならず　其の私を營み　害を除くの至りは　終に萬乘の主を窮海の陬に幽するに至る　その計として中らざるなく　動けば其の志に投ずるに當つては蓋し亦た掌を撫して自ら喜べり　而して事過ぎ物移り　身老ひ氣衰ふるに及んで　靜かにして之れが平昔を念へば　豈に俯仰の間に怵惕焄蒿たるものなからんや　方寸のうち結轖して釋然たる能はざるや　則ちこれを排遣する所以を思ふ　是に於てか　彼の無方無碍と相遺るの說を聞き　爽然として自ら解するあり　曰く　世の所謂ゆる　君臣父子なるものは　本と空假に出でゝ言ふに足らず　木石灰燼の相合するに過ぎず　我れに於て何にかあらんや　吁是れ九世相授け更る々々以て衣鉢として傳ふる所以なり　安んぞ知らん　結跏趺座　國を奪ひ家を簒ふの捷

徑たらざるを　香火喝棒　父を弑し君を弑するの利用たらざるを　吾れ故に論じて之れを發き　以て世の異端を喜んで　而して　其の害を察せざるものを警む

と　是れ藪から棒のみ　是れ虚喝のみ　是れ實彈なき空砲のみ　彼れが北條氏を惡むの餘り　何にかこれを責めんとする材料を得んとするに急なるより　時代と人との關係も忘却し　たま々々禪なるものゝ　本と空假より出るものならんとの外道禪を捉らへ　彼れが悖逆を助くるの資に供せしと論じ來るも　奈何せん　其の悖逆を行ひし人の時代は　我國未だ禪の來らざりしを　斯る見易き道理　否な　事實をも詮索せずして「吁　是れ九世相授け　更る々々以て衣鉢として傳ふる所以なり」と　振り翳せし陣刀は　恰も影げを斬る如く　荒唐無稽沙汰の限りにて　今更禪の何物たるを辯じて　山陽が誤解を匡すの價値なく　事實それ自らより





破壞されたり　夫れ口に堯舜を唱へて禍心を包藏せるもの　古今來英雄其の人鮮からず　王莽は如何　曹操は如何　然るに　其の英雄が口に堯舜を唱へて　敢て悖逆を行ふを視て　是れ堯舜の精神なり　堯舜の道は有害なり　危險なりと云ふも　誰れか之れを肯んずるものあらんや　況んや山陽が云ふ處の禪は　禪にあらず　强ゐて禪の名を下さば　外道禪なり　泰時明惠に學ぶといへども　未だ禪の時に遭はず　況んや其の父たる義時をや　北條氏の禪に歸依する　實に時賴の時にはじまる　然るに山陽は　北條氏簒立より　茲に四世の久しきを經たるにも拘はらず子孫の禪を以て　父祖の簒奪に溯り　さも得意げに「安んぞ知らん　結跏趺座　國を奪ひ家を簒ふの捷徑たらざるを　香火喝棒　父を弑し　君を弑するの利用たらざるを」と　云ふに至つては　愚痴の高頂　殆んど死んだ子の歳を數へて　緣なき人を怨むに似たり　時宗の元虜を禦ぎ　我

が天子の國を保つ　一つに禪の力にあり　正成の王に勤め　一門の心血を盡して　三代其の忠を二にせざる　又た參禪の力に因れり　禪何んの罪かあらん　尊氏が夢想國師に參じて　常に心に安せざりし狀ありと云ふは　其の王室に反抗せし心事を疹むの故にあらずや　余は想ふ　若し義時の世に禪ありて　禪に參せしめば　彼れは如此き無前の悖逆を遣ふせざりしならんに　彼れが時は　天台眞言の末世に屬し　法師は兵器を抗げて王室を犯し　武臣は干戈に訴へて東西にせめぐ　保元平治の兵亂に　後白河帝は　弟の身を以て　崇德帝を讃岐に幽し　義朝は　子の身を以て　爲義の首を斬り　長田は臣の身を以て　三代重恩の君を弑す義時は斯る淺ましき世に生れたるを以て　義時が眼中大義名分なく　ひたすら家を興すの一點に焦心せり　而して　加ふるに天資陰險人に忍ぶの性を具し　恰も源氏が缺陷の弊に乘ず　其の君を弑し　其の父を弑す





悖逆無道　皆なこれを保元平治に見聞して　曾て怪まざる處のものなり　これを以て　彼れは公曉を嗾かして　右太臣家を斃し　右太臣家を名として公曉を誅し　承久の役　竟に三上皇を三州に流し奉ることを敢てせり

聞く　後鳥羽上皇の隱岐に徒され玉ふや　石窟に因つて屋を縛し　纔かに風雨を庇ひ玉ふのみと　如此く御痛はしき月日を送らせ玉ふこと　十有九年にして崩御ます　御父子三帝　千里の波濤を隔て　終天見えさせ玉ふ御事さへも叶はず　大御心のほど申すも畏き御事にて　義時が肉を食ふも　猶ほ饜き足らざるを覺ふ　彼れが家臣深見某の爲め刺され其の非業の死を遂げしは　せめてもの心癒なり　かゝる罪惡重なる北條氏にして　一世二世に亡びざるのみか　却つて子孫の繁榮を見るは　所謂ゆる天道は是歟非歟　准后源の親房卿は　能く此の間の消息を說せら

れたり　曰く

頼朝勳功は　むかしよりたぐひなき程なれど　ひとへに天下を掌にせしかば　君（後鳥羽帝）として安からず思召しける理りなり　況んや　その跡たえて　後室の尼公陪臣の義時が世になりぬれば　彼のあとを削りて御心のまゝにせらるべしと云ふも　一往のいひなきにあらず　然れども　白河鳥羽の御代のころより　政道の占きすがた　やう々々衰へ後白河の御時　兵革おこりて　姦臣世をみだる　天下の民ほと々々塗炭におちにき　頼朝一臂をふるひて　其の亂をたいらげたり　王室はふるきにかへるまでなかりしかど　九重の塵もおさまり　萬民の肩もかすまりぬ　上下堵をやすくし　東より西より其の德に伏せしかば實朝なくなりても　そむくものありとはきこへず　是れにまさるほどの德政なくして　いかで容易くくつがへさるべき　たとひ又失はれぬ





べくとも　民やすかるまじくば　上天よも與し給はじ　次に王者のいくさと云は　咎有を討じて　疵なきをばほろぼさす　頼朝高官にのぼり　守護の職を給ふ　是れみな法皇の勅裁也　わたくしにぬすめりとはさだめがたし　後室其の跡をはからひ　義時久しく彼れが權をとりて　人望にそむかざりしかば　下には未だ疵ありといふべからず　一往のいはればかりにて　追討せられんは　上の御とがとや申すべき謀叛おこしたる朝敵の利を得たるには比量せられがたし　かゝれば時のいたらず　天のゆるさぬ事はうたがひなし　但下の上を尅するはきはめたる非道なり　つゐにはなどか皇化に順はざるべき　先づまことの德政をおこなはれ　朝威を垂れ　彼を剋するばかりの道ありて其の上の事とぞおぼへ侍る

身　帝室と利害を共にする准后にして　南風競はざるの朝に立ち　而か

も其の冷靜にして事理を觀破し　天人の一和を論じ「彼を剋するばかりの道ありて　其の上の事とおぼへ侍る」「但下の上を剋するは　きはめた る非道なり」と　說破し去らるゝところ　識量宏遠　彼の山陽が　兎角情に激して　事理を顧みざる論と　はなはだ徑庭せり　准后は更に一歩を進めて

且は　世の治亂のすがたを　能くかゞみしらせ給ひて　わたくしの御心なくば　干戈を動かさるゝか　弓矢を治めらるゝか　天の命にまかせ　人の望みにしたがはせ給ふべかりし事にや　つゐにしては繼體の道も　正路にかへり　御子孫の世に　一統の聖運をひらかれぬれば　御本意の末だ達せぬにはあらざれど　一且もしづませ給ひしこそ口惜しけれ

古哲曰く　事を議するものは　身　事外に在て　宜しく利害の情を悉く





すべし　事に任ずるものは　身　事中に居つて　當さに利害の慮りを忘るべしと　實に至言なり　世の論者往々にして　埒外に走り　軌道を逸して　事理の正鵠を得ざる所以は　畢竟するに身を事外に置かずして事を議するに在り　今公　身を難局の事中に處して　善く其の利害の慮りを忘れ　國家百年の爲め立論せらる　宜なる哉　神皇正統記の公平にして　日月と其の光りを爭ふをや　然るに山陽が北條氏を議する處を見るに　彼れは唯だ　下として上を剋する大不忠の一點に眼光を注ぎ　公の「先づまことの德政をおこなはれ　朝威を垂れ　彼を剋するばかりの道ありて　其の上の事とぞおぼへ侍る」てふ　一大焦點に着眼せざるを以て彼れが論は　快活喜ぶべしと雖へども　寧靜にこれを觀れば　唯だ情に激せられたる論なり　其の狀　彼の赤穗の變に　堀部安兵衞武林唯七の徒が　主君の御無念一點に胸せまり　城を枕に打死せんと　主張するが